宮城県文化財調査報告書138集

山　王　遺　跡

―仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報―

平成２年３月

宮 城 教 育 委 員 会
多賀城市教育委員会
建設省東地方建設局

序　　文

多賀城市山王遺跡の調査は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設にかかる確認調査です。この道路は、亘理町で国道6号線に接続して名取市、仙台市、多賀城市、石巻市を経て岩手県宮古市に至る仙台湾高規格幹線道路の一環であり、仙台松島遺路の終点列利府春日から仙台市中野に至る4車線100キロ用の高速道路です。

路線計画の決定から分布調査を経て、利府町丘陵部の調査が終えたので、一昨年晩秋の試掘調査の成果をもとに多賀城インター西側にあたる地区のうち7000㎡を対象に調査をいたしました。調査は当教育委員会と多賀城市教育委員会がそれぞれ受託して行い、古代陸奥国府多賀城の西南に隣接する沖積地で、計画的に造営された道路跡や建物跡などを発見し、多大な成果を挙ることができました。

当委員会では、特別史跡であります多賀城跡の調査を鋭意促進してきておりますが、国府多賀城を支えた周辺地域の様子が益々明らかになったことは無上の喜びとするところであります。

本調査概報を刊行するにあたり、遺跡の重要性を深く認識され、工事の早期着工、完成のため高架工法への設計変更を快諾された建設省をはじめ工事関係各機関、ならびに県とともに発掘調査を受託され諸々御協力を賜った多賀城市教育委員会など関係各位に対し、厚く感謝の意を表して巻頭の言葉といたします。

平成 2 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長　武　田　武　男

例　　言

1. 本書は東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設計画に伴う山王遺跡の調査概報である。
2. 調査の主体は宮城県教育委貴会・多賀城市教育委員会であり、宮城県教育庁文化財保護課・多賀城市埋蔵文化財センターが担当し、本概報はこれらの成果を一書にまとめたものである。
3. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った。

   岡村道雄(文化庁記念物課文化財調査官)、西中川駿(鹿児島大学農学部助教授)
   西本豊弘(国立歴史民俗博物館助教授)、宮城県多賀城跡調査研究所
   東北歴史資料館
4. 木製品・金属製品やＳＸ200ウマ集積遺構から出土した骨の保存処理は東北歴史資料館に依頼した。
5. 本書の作成に際して、陶磁器類は千葉孝弥氏(多賀城市埋蔵文化財センター)に御教示を頂いた。
6. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』(小山・竹原;1973)を利用した。本書の第1図は5千分の1の多賀城都市計画図を複製して使用した。
7. 本書は調査員全員が協議しながら赤澤靖章が執筆・編集し、佐藤則之・菅原弘・近藤和夫樹がこれを授けた。
8. 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 ……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 ……4
Ⅲ．発見された遺構と遺物……5
　1．古代 ……5
　2．中世 ……26
　3．近世 ……31
　4．その他の遺物 ……31
Ⅳ．遺構の検討とまとめ……35
　1．古代 ……35
　2．中世 ……38
　3．まとめ ……40

調　査　要　項

遺 跡 名：山王遺跡（宮城県遺跡登載番号18013）
遺跡記号：Ｆ1
所 在 地：宮城県多賀城市南宮字八幡
発掘面積：7000㎡
発掘期間：平成元年6月～12月14日
調査担当：宮城県教育委員庁文化財保護課・多賀城市埋蔵文化センター
調 査 員：進藤秋輝・佐藤則之・赤澤靖章・菅原弘樹・近藤和夫・（宮城県教育文化財保護課）
　　石川俊英・石本敬（多賀城市埋蔵文化財センター）

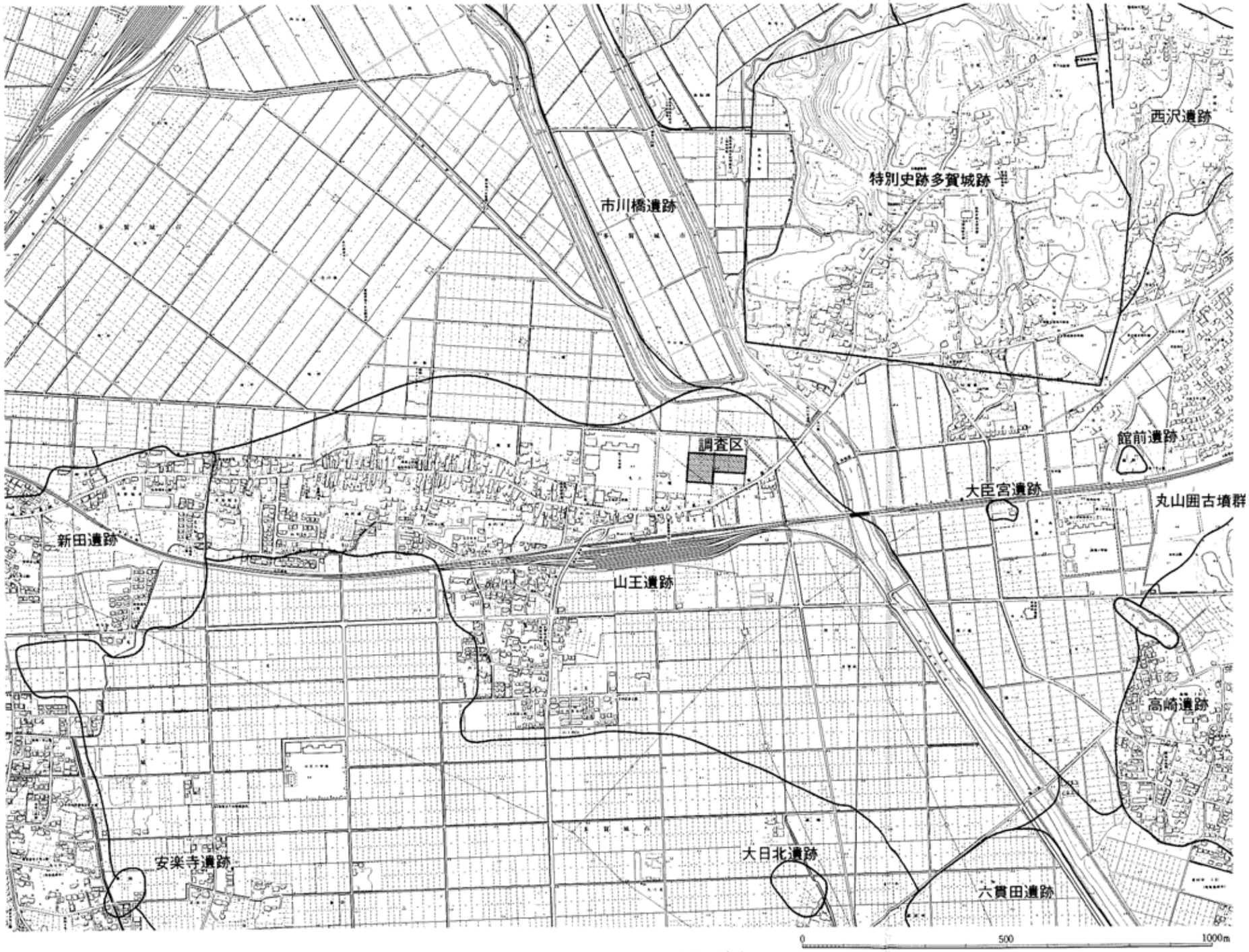
Ⅰ．調査に至る経過

建設省東北地方建設局、日本道路公団、宮城県道路公社、宮城県、仙台市で構成する仙塩地区総合交通計画委員会は昭和47～52年に仙台湾高規格幹道路事業計画を立案した。その路線に亘理町中泉で国道6号線に連結して仙台市、多賀城市、利府町、松島町、鳴瀬町、矢本町、石巻市、桃生町を経て、岩手県宮古市に至るもので、そのうち仙台松島道路昭和62年に供用を開始している。この仙台松島道路の南終点である利府町春日から仙台市中野に至る7.1㎞が東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路である。

仙塩道路の計画決定に伴い、昭和56年11月に東北建設局仙台工事事務所から路線敷内の埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。それを受けて、宮城県教育委員会は利府町教育委員会、多賀城市教育委員会と共に昭和57年3月に分布調査を実施した。その結果、利府町の丘陵で5遺跡、特別史跡多賀城跡の西に隣接する低湿地地域で市川橋遺跡、山王遺跡、六貫田跡がかかわることになった。これらの遺跡は奈良、平安時代の陸奥国府多賀城の城下の地域にあたるため、路線敷の全てが遺跡に包含されるものであった。山王遺跡はこれまでの他諸事業にかかわる調査結果からみて、極めて濃密な遺構の存在が推定された。

道路は当初の計画では基底幅80mで10数mの高さに盛土するものであったため、調査対象面積40ha、さらに縄文時代から中・近世まで8層の文化層が予想されることから膨大な時間と費用が見込まれれた。供用開始の時期をも考慮して、宮城県教育委員会では昭和62年11月に東北建設局に対して盛土工法から高架工法への変更を申し入れた。工事事務所からは設計変更を進めるに当たり文化層の具体的な数と遺構の密集度についての資料が求められたため、利府町調査が一応終了した昭和63年11・12月に山王遺跡の自然堤防上とそれに隣接する市川橋遺跡のうち1500㎡について確認調査を実施した。その結果、山王遺跡では掘立柱建物や多賀城城下の道路遺構の他、下層から古墳時代後期、中期初頭、縄文時代の遺構や遺物が発見された。また、市川橋遺跡でも8層にわたる水田遺構が重複していることが確かめられた。このようなデータが明らかになったため、仙台工事事務所は東北地方建設局、建設省との協議を経て高架工法へ設計変更することになった。

今年度の調査は複雑な遺跡の全体像を早急に把握し、効率よく作業を進めるため、山王遺跡の自然堤防上の7000㎡について調査することにした。7000㎡のうち、5000㎡については宮城県教育委員会が受託して平成元年6月8日から、残りの2000㎡については多賀城市教育委員会が受託して7月1日から調査を開始し、12月14日にともに野外調査を終了した。調査区が隣接したことから遺物整理は両教育委員会がそれぞれ行い、概報の執筆、刊行については担当者の協議を経て、宮城県教育委員会がとりまとめた。



第１図　山王遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ．遺跡の位置と環境

多賀城市は市域のほぼ中央を流れる砂押川によって東部・北部の丘陵台地部と、南部・西部に広がる沖積平野部とに大きく二分されている。この平野部は海岸まで広がっており、仙台平野の東端部にあたるものである。

山王遺跡はこの平野部の北東端にあたり、砂押川や七北田川などによって形成され東西に自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は多賀城市山王および南宮を中心とする東西約2㎞、南北1㎞の広範囲にわたる。今回の調査区は本遺跡の北東隅に当たる多賀城市南宮字八幡地区で、付近の標高は約4mである（第1図）。

周辺の遺跡としては、本調査区の北東約1㎞の丘陵上に古代陸奥国国府である特別史跡多賀城跡がある。また、多賀城跡の南前面の残丘上にある館前・大臣宮遺跡や、南東約1.2㎞の丘陵上にある多賀城廃寺など、多賀城と密接な関連をもつ建物群や寺院跡が存在する。一方、多賀城跡の南西部から西に延びる自然堤防を中心とした沖積地には本遺跡をはじめ、市川橋遺跡や新田遺跡、六貫田遺跡などが立地しており、これまでの発掘調査により古墳時代の集落をはじめ、古代、中世の遺物が多数発見されている。本遺跡はこれらの遺跡とともに、古代史の研究上で、現在特に関心が寄せられている古代の国府周辺地域の様相を解明する上で重要な位置を占めている。

山王遺跡はこれまでに、多賀城市教育委員会によって8回、他に宮城県教青委貴会によって数回の確認調査が実施され、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物が多数検出されている。古墳時代の遺構は山王二区・西町浦・東町浦の各地区で検出されている。特に西町浦地区では土壙墓や竪穴住居跡とともに多量の石製模造品や未製品・滑石の原石が出土しており、集落と墓域の関係や集落内での祭祀品の製作などを証する資料が得られている。奈良・平安時代については特に多賀城跡との関連から遺構・遺物とも非常に多く、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙等が多数検出されている。そのなかでも第4・8次の東町浦地区の調査では、多賀城跡外郭南辺とほぼ平行する東西方向の道路跡が発見され、多賀城跡外郭南辺地域における古代の集落構成や土地の地割について興味深い資料を提供することとなった。中世・近世については掘立柱建物跡、井戸跡、土壙跡、墓跡などがあり、陶磁器類や古銭、さまざまな木製品などが発見されている。

以上述べてきたように、山王遺跡では古墳時代から近世に至るまで各時代の遺構や遺物がまとまって検出され、これらは非常に濃密に存在していることが明らかになっている。とりわけ、古代においては多賀城跡と密接な関連をもつ遺構や遺物が普遍的に出土しており、国府多賀城ならびにその周辺の国府域を考える上で重要な意味を持つものと考えられる。

Ⅲ．発見された遺構と遺物

調査を開始するにあたって、調査区が広範囲にわたるため、ほぼ中央にある農道の西側を便宜的にＡ区、東側をＢ区と呼ぶことにした。

平面図の作成に際してはＡ区の東側に原点(0、0)を設定し、原点を通る真北方向のを南北基準線とし、それと直交する東西の直線を東西基準線とした。この原点を0とし基準線に則って調査区内に3mの方眼を組み、東西方向は原点を境に東をＥ、西をＷとして、点から1m離れる毎にアラビア数字でＥ1．Ｅ2．Ｅ3・・・・・、W1.W2.W3・・・・・・と表わした。南北方向は原点を境に北をＮ、南をＳとして、同様に表わした。

原点の国家座標はＸ＝188.880.000、Ｙ＝13.230.000である。

今回の調査では、次のような遺構が検出された。道路跡2条、掘立柱建物跡22棟以上、住居跡4軒、井戸跡6基、甕棺墓2基、畝状遺構18面、溝跡124条以上、土壙90基以上、墓跡8基、河川跡、多数の柱穴などである。またこれらの遺構や堆積層、表土等からは土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器、瓦、鉄製品、銅製品、土製品、石器、石製品、古銭、木製品、人や動物の骨などが出土し、量的には整理用コンテナで172箱程になる。遺構の年代は古代、中世、近世と大きく3区分することができる。以下、古代、中世、近世の順に遺構及び遺物の概要を説明する。

1．古代

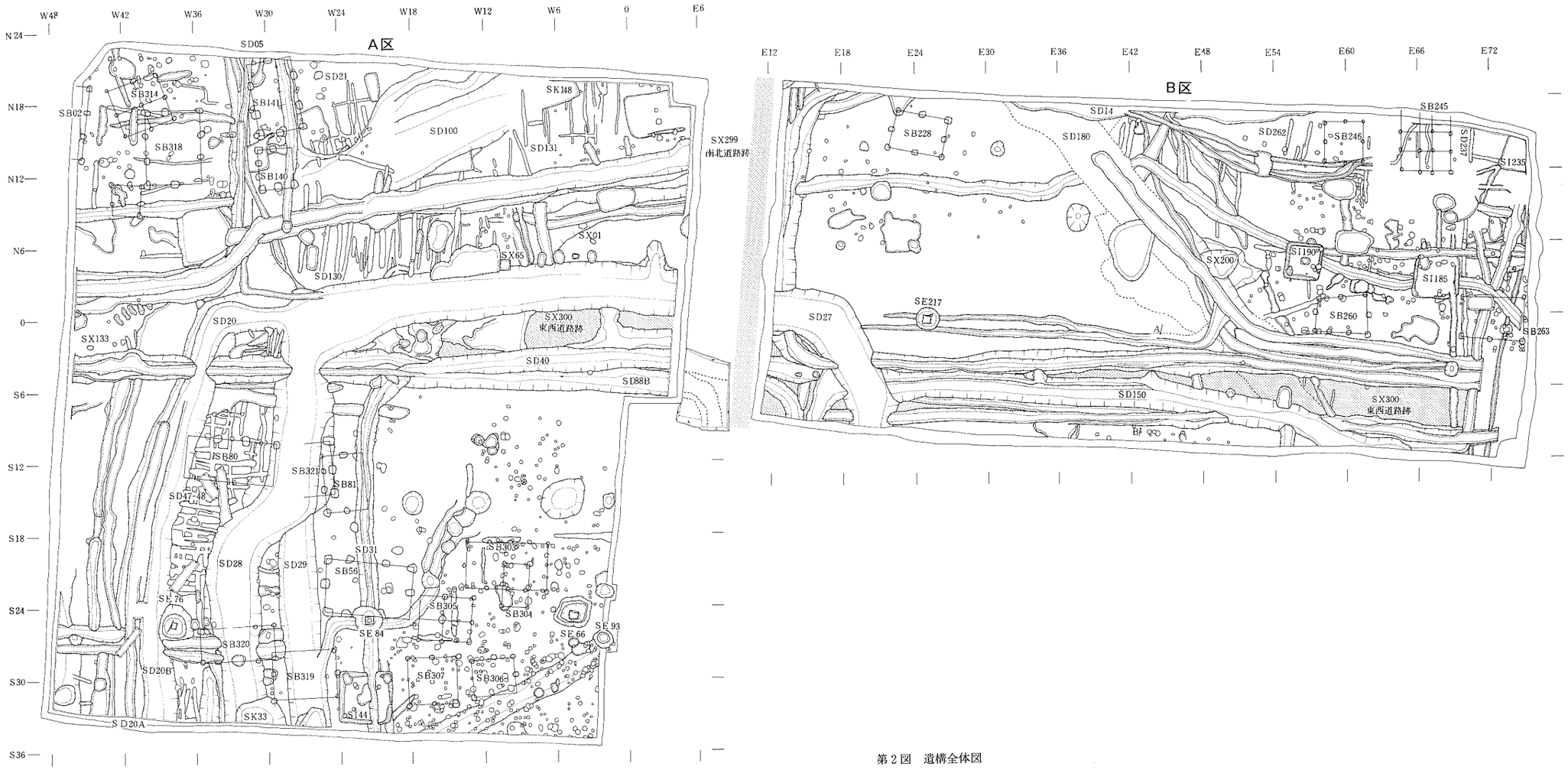
古代の遺構としては道路跡2条、掘立柱建物跡17棟以上、竪穴住居跡4軒、井戸5基、甕棺墓2基、畝状遺構18面、溝跡、土壙、土壙墓1基、河川跡、柱穴などがある。

Ａ．道路跡　(第2図)

【ＳＸ300道路跡】東西方向に延びる道路跡である。ＳＤ20Ｂ・27・28・40・150溝跡、ＳＤ14・100河川跡などと重複し、ＳＤ20Ｂ・27・28・40・150・14よりも古く、ＳＤ100よりも新しい。道路跡は両側に側溝を持ち、調査区中央でＳＸ299南北道路跡と交差する。道路の方向はＥ-3°-Ｓで、バラス等の路面施設は確認されなかった。側溝には3時期の変遷が確認され(第5図)、これらはほぼ同位置で作り替えられている(古い順にＳＸ300Ａ、ＳＤ224・162→ＳＸ300Ｂ、ＳＤ88Ｂ・165・I92→ＳＸ300Ｃ、ＳＤ88Ａ・161・163)。

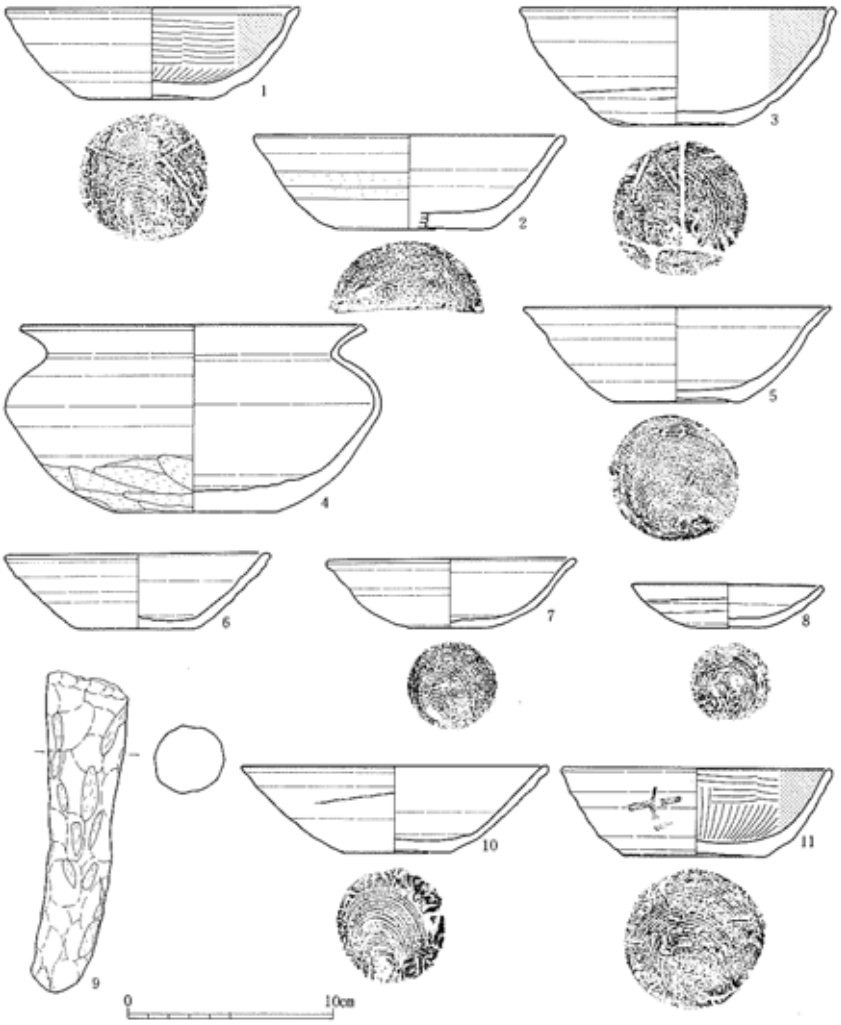
ＳＸ300ＡはＳＸ299Ａ南北道路とつながり、路幅は側溝の心心で4.3mある。側溝はＳＤ224(北側)、ＳＤ162(南側)で、Ａ区ではこの時期の側溝は検出されなかった。

ＳＤ224は他の溝によって壊され一部分だけ残存し、上幅1.6m、下幅0.8m、深さ0.3m程で、埋土は暗灰黄色の自然堆積土である。


A区
B区
SX299
南北道路跡
SX300
東西道路跡
SX300
東西道路跡
SD05
SD21
SB314
SB02
SB318
SB141
SB140
SD100
SD131
SK48
SX01
SX65
SD130
SD20
SX133
SD40
SD88B
SB80
SB321
SB81
SD47
SD48
SD28
SD29
SD31
SB56
SB303
SB305
SB304
SE76
SE84
SE66
SE93
SB320
SB319
SB307
SB306
SD20B
SK33
SI44
SD20A
SD14
SB228
SD180
SD262
SB246
SB245
SD227
SI235
SX200
SI190
SI185
SE217
SD27
SB260
SB263
SD150
A
A'
B
B'
W48
W42
W36
W30
W24
W18
W12
W6
0
E6
E12
E18
E24
E30
E36
E42
E48
E54
E60
E66
E72
N24
N18
N12
N6
0
S6
S12
S18
S24
S30
S36

第２図　遺構全体図

6・7



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No.	図版No.
1	土師器坏	SD163	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.3cm	6.0cm	4.5cm	R-112	6-6
2	須恵器坏	SD163	ロクロナデ→回転ケズリ	ロクロナデ	ナデ	15.2cm	7.0cm	4.6cm	R-118	
3	土師器坏	SD163	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	15.4cm	6.0cm	5.0cm	R-210	6-5
4	須恵器壺	SD163	ロクロナデ→手持ちケズリ	ロクロナデ	手持ちケズリ	16.8cm	8.0cm	9.2cm	R-172	
5	赤焼土器坏	SD163	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	15.0cm	6.0cm	4.7cm	R-120	
6	赤焼土器坏	SD163 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	13.0cm	5.6cm	3.7cm	R-117	
7	赤焼土器坏	SD163 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	12.2cm	4.0cm	3.4cm	R-119	
8	赤焼土器小皿	SD163	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	9.4cm	3.0cm	2.2cm	R-190	9-5
9	赤焼土器脚	SD163 2層	指頭によるオサエ→ケズリ						R-169	11-4
10	赤焼土器坏	SD163 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	15.0cm	5.0cm	4.3cm	R-121	
11	土師器坏	SD163 3層	ロクロナデ・黒色	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	13.4cm	7.0cm	4.4cm	R-113	

第３図　道路跡側溝出土遺物（１）

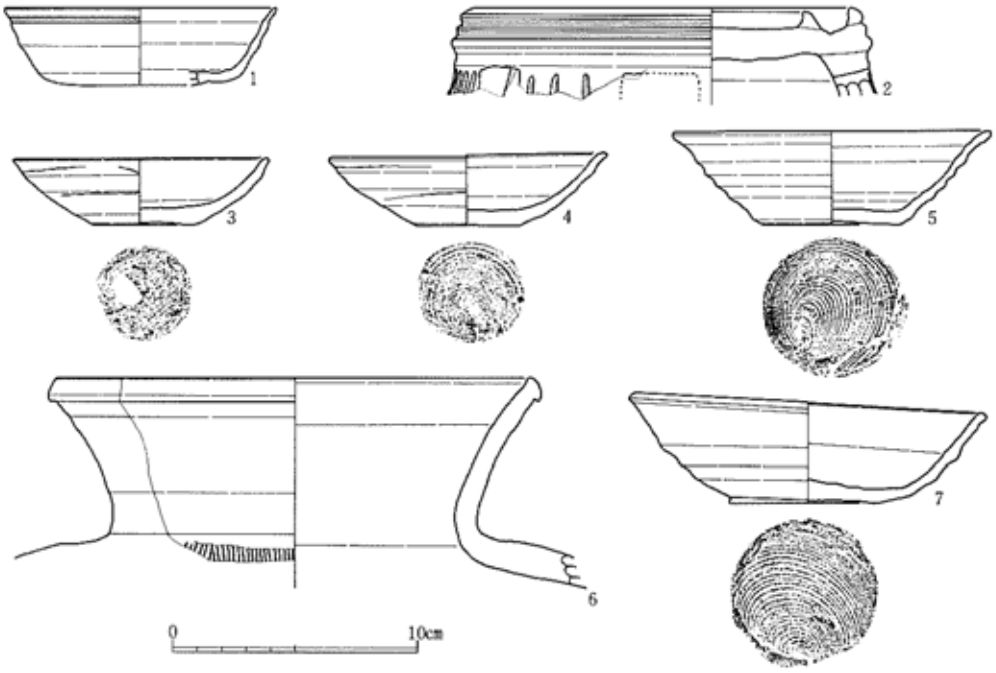
ＳＤ162は上幅0.6～1.2m、下幅0.4～0.7m、深さ0.2m程で、埋土は地山ブロックを多く含む黄灰色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏・高台付坏・高台付皿・甕、須恵器坏・高台付坏・甕・瓶、赤焼土器坏、平瓦・丸瓦が出土している。

ＳＸ300ＢはＳＸ299Ｂとつながり、路幅は側溝の心心で5.0mある。側溝はＳＤ165(北側)、ＳＤ88Ｂ・192(南側)である。

ＳＤ165は上幅1.6～2.1m、下幅0.3～0.6m、深さ0.5m程で、埋土は灰白色火山灰を含んだ黄褐色や黒褐色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏(第4図1)・甕、平瓦・丸瓦、曲物の底板が出土している。

ＳＤ88Ｂは上幅1.6～2.6m、下幅0.2～1.0m、深さ0.6m程で、埋土は灰白色火山灰を含んだ灰黄色や黒褐色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏(第4図5)・高台付坏・蓋・甕・瓶・風字硯、赤焼土器坏、平瓦・丸瓦・軒丸瓦が出土している。

ＳＤ192は上幅1.0m、下幅0.4m、深さ0.4mで、埋土は地山ブロックや灰白色火山灰を含ん



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	須恵器坏	ＳＤ165	ロクロナデ	ロクロナデ		11.2cm	4.4cm	3.2cm	R-163	
2	須恵器円面硯	ＳＤ161	3本の平行沈線＋長方形の透かし			15.4cm			R-57	8-11
3	赤焼土器坏	ＳＤ161 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	10.5cm	4.0cm	2.8cm	R-111	9-6
4	赤焼土器坏	ＳＤ161 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	11.4cm	4.3cm	3.0cm	R-146	9-4
5	須恵器坏	ＳＤ88Ｂ3層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	13.6cm	5.6cm	3.9cm	R-235	8-5
6	須恵器甕	ＳＤ205 1層	口縁部ロクロナデ、体部平行叩き	ロクロナデ		19.2cm			R-226	
7	赤焼土器坏	ＳＤ212	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	14.6cm	6.0cm	4.2cm	R-189	9-3

第４図　道路跡側溝出土遺物（２）

だ黄灰色の自然堆積土である。土師器坏・高台付坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、赤焼土器坏・高台付坏、平瓦・丸瓦が出土している。

ＳＸ300ＣはＳＸ299Ｃとつながり、路幅は側溝の心心で3.0～4.8mある。側溝はＳＤ163(北側)、ＳＤ88Ａ・161(南側)である。

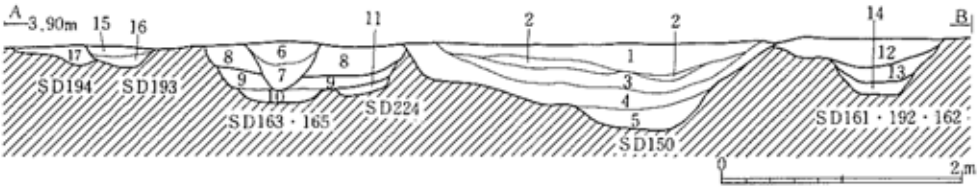
ＳＤ163は上幅0.7～1.8m、下幅0.3～0.9m、深さ0.3m程で、埋土は黄灰色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏(第3図1・3・11)・甕、須恵器坏(第3図2)・甕(第3図4)、赤焼土器坏(第3図5・6・7・10)・小皿(第3図8)・高台付坏・脚(第3図9)、平瓦・丸瓦が出土している。

ＳＤ88ＡはＳＤ88Ｂに大きく壊され規模は不明で、埋土は黄灰色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・瓶・風字硯、赤焼土器坏・高台付坏、丸瓦が出土している。

ＳＤ161は上幅0.7～1.4m、下幅0.2～1.1m、深さ0.1m程で、埋土は暗灰黄色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏・高台付坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕・長頸瓶・壷・円面硯(第4図2)、赤焼土器坏(第4図3・4)、平瓦・丸瓦が出土している。

【ＳＸ299南北道路】南北方向に延びる道路跡である。ＳＤ14・100河川跡などと重複し、ＳＤ14よりも古く、ＳＤ100より新しい。道路の方向はN-6°-Eで、路幅や路面の舗装等については不明である。側溝はＳＸ300東西遺路を挟んで北側では東側溝(ＳＤ212・211・205)を、南側では西側溝を確認した。また調査は東側側溝のみ行い、その結果3時期あることがわかった。

ＳＸ299Ａの東側溝ＳＤ212はＳＸ300Ａと交差地点から約18m北へ直線的に延びた後、緩やかに東へ曲がる。上幅1.9m、下層0.7m、深さ0.4m程で、埋土は地山ブロックを含み、粘性のある褐色の自然堆積土である。土中から土師器坏・甕、須恵器坏・高台付付・甕・瓶、赤焼土器坏（第4図7）、平瓦・丸瓦が出土している。



番号	土色	土性	備考	番号	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	ＳＤ150 埋土	10	黄灰色 (2.5Y6/1)	砂質シルト	ＳＤ165 埋土（ＳＸ300 Ｂ北側溝）,灰白色火山灰含
2	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	ＳＤ150 埋土	11	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂質シルト	ＳＤ224 埋土（ＳＸ300 Ａ北側溝）
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土	ＳＤ150 埋土	12	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	ＳＤ161 埋土（ＳＸ300 Ｃ南側溝）
4	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	ＳＤ150 埋土	13	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	ＳＤ192 埋土（ＳＸ300 Ｂ南側溝）,灰白色火山灰含
5	オリーブ黒色(5Y3/1)	粘土	ＳＤ150 埋土	14	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	ＳＤ162 埋土（ＳＸ300 Ａ南側溝）
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	ＳＤ177 埋土	15	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	ＳＤ193 埋土
7	暗褐色 (2.5Y4/2)	シルト	ＳＤ177 埋土	16	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	ＳＤ193 埋土
8	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	ＳＤ163 埋土（ＳＸ300 Ｃ北側溝）	17	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	ＳＤ194 埋土
9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	ＳＤ165 埋土（ＳＸ300 Ｂ北側溝）,灰白色火山灰含				

第５図　道路跡断面図

ＳＸ299Ｂの東側溝ＳＤ211は先行するＳＸ29Ａと同位置にあり、上幅約1.7m下幅約0.5m、深さ0.4m程で、埋土は地山砂、灰白色火山灰を含んだ黄灰色などの自然堆積土である。埋土中から土師器坏・甕・壷、須恵器坏・高台付坏・甕、赤焼土器坏、平瓦・丸瓦が出土している。

ＳＸ299Ｃの東側溝ＳＤ205は先行するＡ・Ｂとほぼ同位置にあるものの、北側で曲がらず直線的に延びる。上幅は不明、下層約0.3m、深さ0.2m程で埋土は地山砂を含んだ暗灰黄色の自然堆積土である。埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕（第4図6）・瓶、赤焼土器高台付坏、平瓦・丸瓦、土錘（図版11－2）が出土している。

Ｂ．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は17棟以上が確認された。以下、主な建物について説明する。

【ＳＢ02掘立柱建物跡】南北に並ぶ4個の柱穴から推定したもので西側が調査区域外に延びている。柱間は北から2.2m・2.0m・1.9mとなる。建物の方向はN-6°-Eである。柱穴は方形で一辺が0.5m程、深さ0.4m程で、埋土は地山土を多く含んだ黄褐色土である。柱痕跡は直径約15㎝の円形である。

【ＳＢ56掘立柱建物跡】桁行4間、梁行2間の東西棟で、ＳＤ31溝跡より古く、ＳＥ84井戸跡より新しい。1度建替えられている(第6図)。

ＳＢ56Ａは後続するＳＢ56Ｂと同位置で重複し規模も同様と思われる。

ＳＢ56Ｂの柱間は桁行が南側柱列で西から1.7m・1.4m・1.5m・不明、梁行が西妻で北から1.9m・2.2mである。建物の方向はE-5°-Ｓである。柱穴は方形で一辺が0.8m程、深さ0.4m程で、埋土は地山砂を含む暗褐色土である。柱痕跡は直径が約20㎝の円形である。

【ＳＢ81掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の南北棟で、東側柱列はＳＤ31溝跡によって壊されている。柱間は桁行が西側柱列で北から1.3m・1.6m・1.8m、梁行が南妻で西から1.6m・不明である。建物の方向は西側柱列でN-5°-Wである。柱穴は方形で一辺が0.6m程、深さ0.2m程で、埋土は地山砂を含む暗褐色土である。柱痕跡は直径20㎝程の円形である。

【ＳＢ140掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の南北棟で、ＳＤ100河川跡の1層除去後に検出された(図版3-I)。柱間は桁行が西側柱列で北から1.1m・1.2m・1.1m、梁行は南妻で東から1.3m・1.6mである。建物の方向は西側柱列N-4°-Wである。柱穴は方形で一辺が0.6m程、深さ0.3m程、埋土は黒褐色粘土や地山砂をブロック状に含んだ褐色土で炭化物が若干混じる。柱痕跡は直径が15㎝程の円形である。このうち1個に柱抜取穴がある。

【ＳＢ141掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の南北棟で、1度同位置で建替えられている(図版3-2)。

ＳＢ141Ａの柱間は桁行が東側柱列で南から2.1m・2.4m・1.6m、梁行は南妻で1.8m等間

である。建物方向は東側柱列でN-９°-Wである。柱穴は方形で一辺が0.6m程、深さ0.3m程で、埋土は地山土を多く含む褐色土である。柱痕跡は直径が15㎝程の円形である。

ＳＢ141Ｂは柱間は桁行が柱側柱列で南から1.6m・2.7m・1.6m、梁行は南側柱列で東から2.2m・2.0mである。柱穴は方形で一辺が0.6m程、深さ0.4m程で、埋土は地山土を多く含む褐色土である。柱痕跡は円形や方形で一辺が約15㎝である。

【ＳＢ228掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の東西棟で、柱間は南側柱列で東から2.2m・2.3m、西側柱列で北から1.6m等間である。建物の方向は南側柱列でＥ-11°-Ｓである。柱穴は一辺が0.5m程の方形である。

【ＳＢ245掘立柱建物跡】東西3間、南北3間以上の建物で、堆積層2層上面で検出した。柱間は南側柱列で東から1.5m・1.0m・1.5m、西側柱列で南から1.5m・1.6m・不明である。建物の方向は西側柱列でN-2°-Wである。柱穴は方形で一辺が0.2m程で、柱痕跡は円形と方形で一辺が10㎝程である。

【ＳＢ246掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の平面形がほぼ正方形の建物で、堆積層3層に覆われていた。1度同位置で建替えられている。柱間は南側柱列で東から1.5m・1.3m、東側柱列で北から1.3m・1.6mである。建物の方向は東側柱列で東から1.5m・1.3m、東側柱列で北から1.3m・1.6mである。建物の方向は東側柱列でN-1°-Wである。柱穴は方形で一辺が0.3m程、柱痕跡は直径が約10㎝の円形で、柱材が残っているものもある。

【ＳＢ260掘立柱建物跡】桁行が南側柱列3間、北側柱列で2間、梁行2間の東西棟で、柱間は桁行が南側柱列で東から1.6m・1.6m・1.2m、北側柱列で東から2.0m・1.7m、梁行が東妻で北から1.7m・1.6mである。建物の方向は南側柱列でＥ-3°-Ｓである。柱穴は方形で一辺が0.4m程であり、柱痕跡は直径が約15㎝の円形である。

【ＳＢ263掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の東西棟で、柱間は桁行が南側柱列で東から2.7m・2.3m、梁行が東妻で北から1.7m・1.9mである。建物の方向は東側柱でＮ－3°-Ｅである。柱穴は方形で一辺が0.4m程で、柱痕跡は直径が約20㎝の円形である

【ＳＢ314掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、ＳＢ318と重複するが新旧関係は不明である。柱間は西側柱列で北から2.2m、1.9m、南側柱列で東から2.2m、2.3mである。建物の方向は西側柱列でN-21°-Wである。柱穴は円形や方形で、一辺が0.4m程、深さ0.3m程で、埋土は地山土を斑状に多く含んだ黄褐色土である。柱痕跡は直径15㎝程の円形である。

【ＳＢ318掘立柱建物跡】桁行3間、梁行2間の南北棟で、柱間は桁行が西側柱列で2.0m等間、梁行が北妻で東から2.8m・1.8mである。建物の方向は西側柱列でN-3°-Wである。柱穴は方形や楕円形で一辺が0.6m程、深さ0.3m程ある。埋土は地山土を多く含んだ褐色土で、炭化物が混じる。このうち2個で柱抜取穴が確認できた。柱痕跡は直径が約15㎝の円形である。

【ＳＢ319掘立柱建物跡】ＳＤ29溝跡を挟んで両側にある5個の柱穴から推定した東西棟で、

梁行は2間であるが桁行は不明である(第6図)。ＳＤ29、ＳＢ320掘立柱建物跡、ＳＩ14竪穴住居跡と重複し、ＳＤ29より古いが、その他との新旧関係は不明である。建物の方向は東側柱列でN-2°-Wである。柱間は梁行が東妻で北から2.0m・1.9mであり、桁行は総長5.3mである。柱穴は方形や円形で一辺が0.5m程、深さ0.4m程で、埋土は地山土を含んだ黒褐色土である。柱痕跡は直径15㎝程の円形である。

【ＳＢ320掘立柱建物跡】ＳＤ28溝跡を挟んで両側にある6個の柱穴から推定した東西棟である(第6図)。総長は桁行が4.9m以上、梁行が2.8m、柱間は桁行が北側柱列の東端で1.6mある。建物の方向は南側柱列でＥ-2°-Nである。柱穴は方形や円形で一辺が0.4mほど、深さ0.4m程で、埋土は地山土を含んだ黄褐色土と黒褐色土である。またその中の2個には底面に礎板が据えられていた柱痕跡は直径15㎝程の円形である。

Ｃ．竪穴住居跡

竪穴住居跡はＡ区から1軒、Ｂ区から3件検出され、このうちの調査された3軒について説明する。

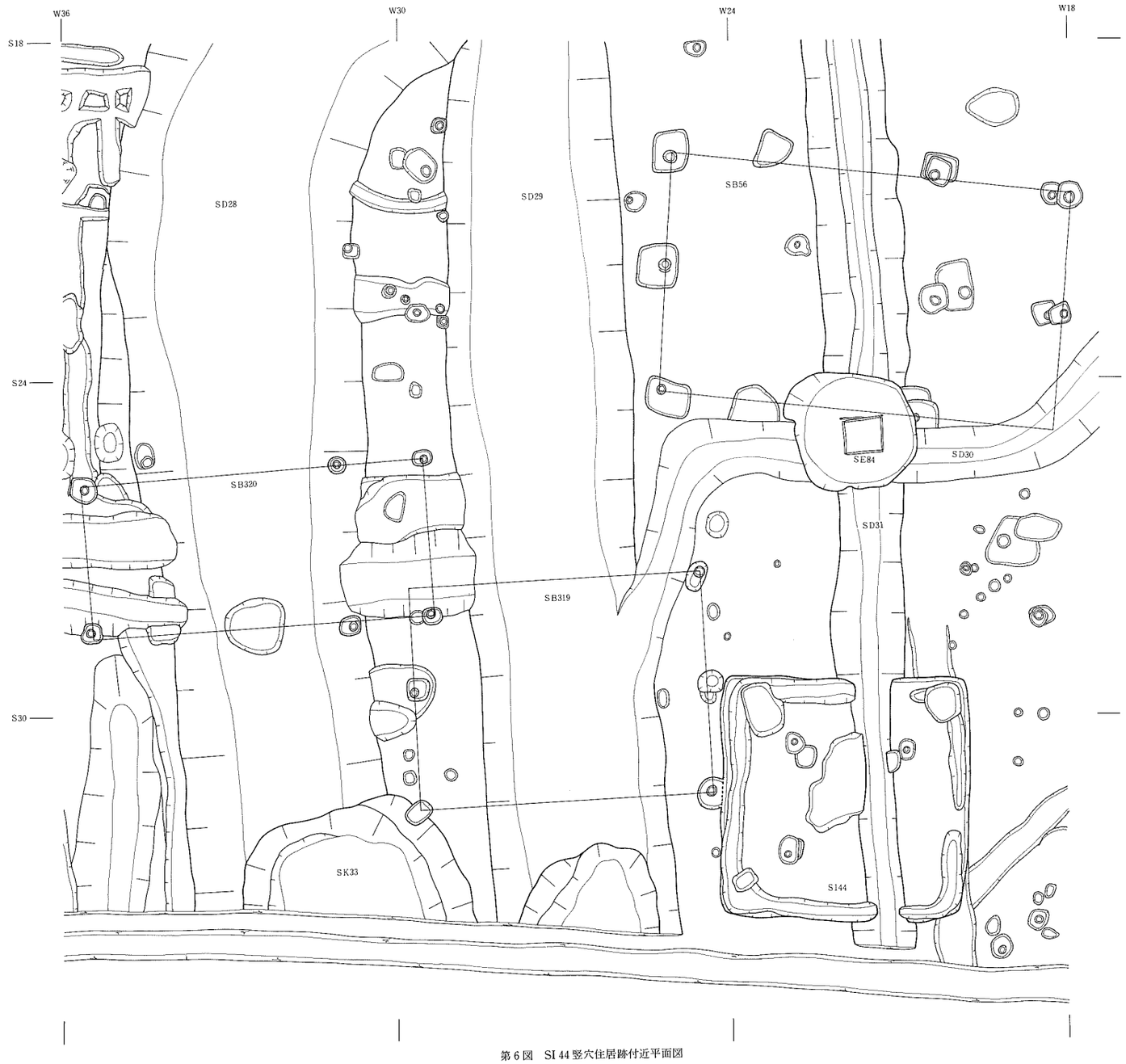
【ＳＩ44竪穴住居跡】ＳＢ39掘立柱建物跡・ＳＤ31溝跡と重複し、ＳＤ31よりも古く、ＳＢ319とは新旧関係は不明である。改築が1度同位置で行われ、住居の方向は西辺でN-1°-Eである（第6図）。

ＳＩ44Ａは一辺が4.3mの正方形で周溝が巡っている。カマドは検出されなかった。掘り方を掘り黄褐色土で貼床しており、壁高は最も高い部分で約25㎝残っている。周溝は断面が「U」形で幅30㎝程、深さ15㎝程ある。柱穴は3個検出され、柱間隔は北側・西側とも1.6mである。形状は方形で一辺が40㎝程、深さ約25㎝で、埋土は黄褐色土である。そのほか床面の北東隅・北西隅・南西隅・中央に計4基の土壙を検出した。

ＳＩ44Ｂは東西4.4m、南北4.3mのほぼ正方形で、周溝が巡っている。先行するＳＩ44Ａの上に黄褐色粘土を貼床しており、壁高は最も高い部分で約15㎝ある。埋土は地山土をブロック状に含む黒褐色土である。周溝は断面が「U」形、幅約25㎝、深さ約10㎝である。カマドは検出されなかったものの北東部に炭化物層が認められたため、北壁のＳＤ31溝跡で壊された位置にあったと考えられる。柱穴は3個検出され、柱間隔は北側・西側とも2.0mである。形状は方形で一辺が40㎝程、深さ約20㎝で、埋土は暗褐色土である。柱痕跡は直径が約15㎝の円形である。

住居埋土中から土師器坏・高坏(第7図4)・甕、須恵器坏(第7図1～3)・高坏・蓋・甕・瓶・転用硯(第7図5)、平瓦（第7図5）・丸瓦（第7図7）が出土している。

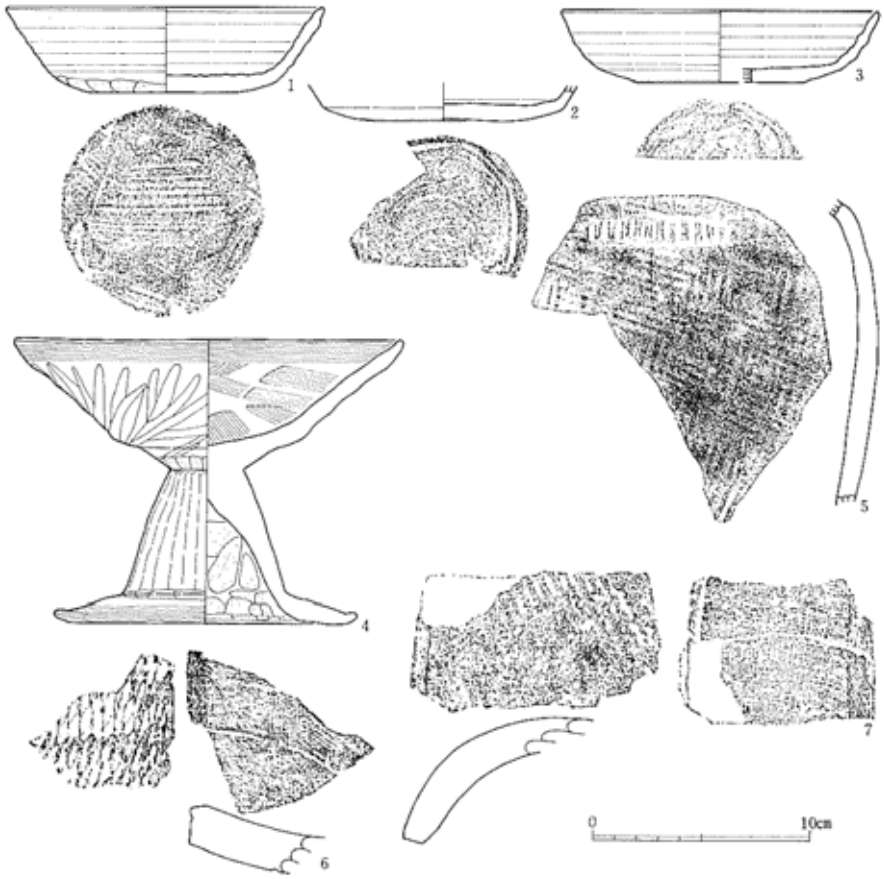
【ＳＩ185竪穴住居跡】ＳＤ168・170溝跡等と重複し、ＳＤ170より古く、ＳＤ168よりも新しい。規模は北壁がＳＤ170によって壊されているが、およそ一辺3.9mの正方形で、住居の方向は東



第 6 図　SI 44 竪穴住居跡付近平面図

辺でN-5°-Eとなる。埋土は褐色土である。掘り方を掘り黄褐色土で貼床している。周溝は断面が「U」形で幅30㎝程、深さ約20㎝で、南辺の一部と北東隅でとぎれる。

また東辺と西辺の周溝中に板材の痕跡が確認できた。カマドについては検出されなかったものの、北辺部付近から多量の炭化物層が認められたため、北壁に存在したと推定される。柱穴は検出されなかった。そのほか床面の北西隅に直径約1.0m、深さ約0.2mの円形の土壙を検出



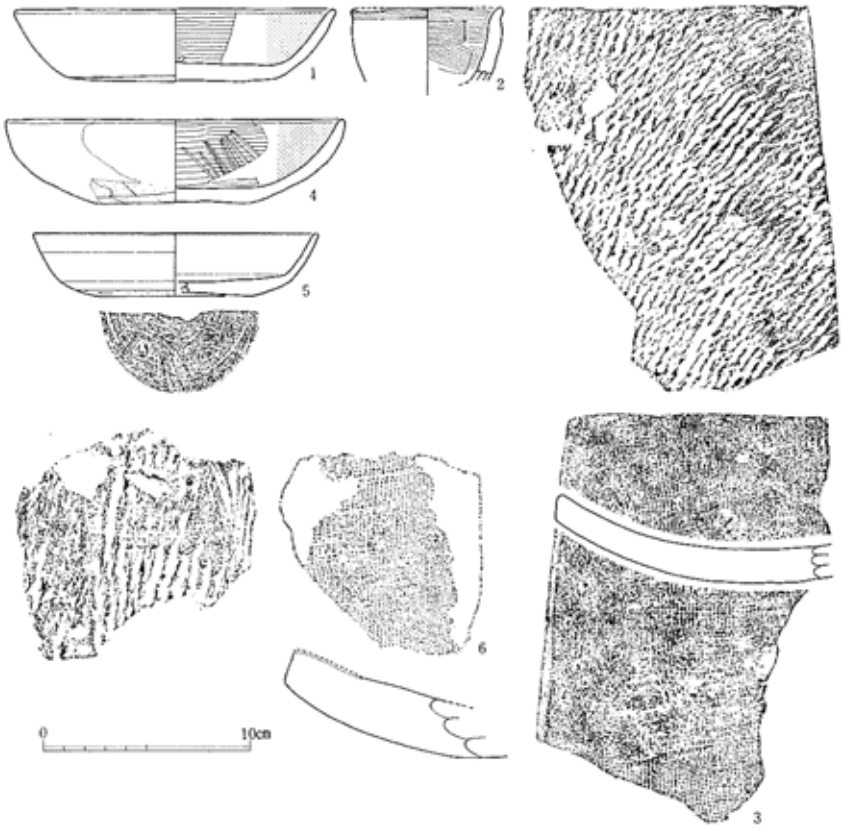
番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	須恵器坏	SI44 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り→手持ちケズリ	14.8cm	7.0cm	4.0cm	R-188	8-1
2	須恵器坏	SI44 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→手持ちケズリ		7.0cm		R-128	
3	須恵器坏	SI44 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちケズリ	14.8cm	7.6cm	3.4cm	R-131	
4	土師器高坏	SI44 床面	坏口縁部横ナデ、体部縦いくガキ、脚部ナデケズリ、脚部縦いてガキ、裾部横ナデ	坏口縁部横ナデ、体部ヘラナデ、脚部ケズリ、裾部横ナデ		18.0cm	14.0cm	13.1cm	R-132	
5	須恵器壺（転用硯）	SI44 2層	平行叩き	同心円当て板痕跡、摩滅					R-127	
6	平瓦（Ⅱ期）	SI44 2層	凸面布目→ナデ	凸面縄叩き→つぶれ					R-129	
7	丸瓦（Ⅱ期）	SI44 1層	凸面縄叩き→ロクロナデ	凹面布目					R-130	

第７図　SI 44 竪穴住居跡出土遺物

した。

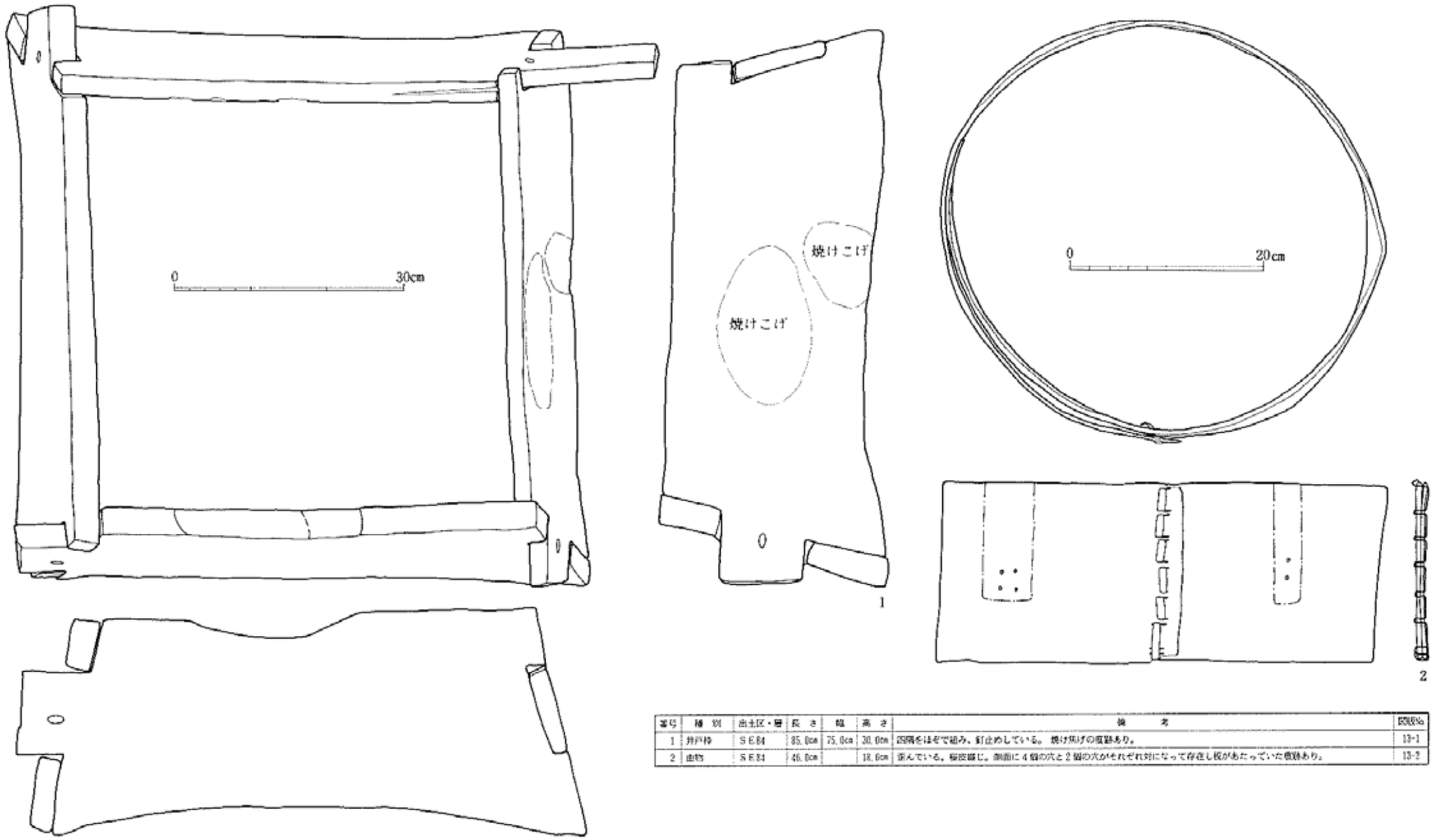
掘り方土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、床面から土師器坏・甕、須恵器坏、周溝埋土中から土師器坏・甕（第8図2）、須恵器甕、平瓦(第8図3)、住居埋土中から土師器坏（第8図1）甕、須恵器坏・甕、平瓦がそれぞれ出土している。

【ＳＩ190竪穴住居跡】ＳＤ168・170等と重複し、これらよりも新しい。一辺が3.1mの正方形で、2度の改築が行われ3時期とも周溝の位置から同規模のと思われる。住居の方向は西辺でＮ-5°-Ｅとなる。柱穴は3時期とも検出されなかった。



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	DSBNo
1	土師器坏	ＳＩ185 1層	摩滅	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ	15.6cm	10.0cm	3.6cm	R-241	
2	土師器甕	ＳＩ185 周溝	口縁部横ナデ・体部摩滅	口縁部横ナデ・体部手持ちケズリ		7.2cm			R-243	
3	平瓦（玄関）	ＳＩ185 周溝	同面布目	凸面縄叩き→つぶれ					R-242	
4	土師器坏	ＳＩ190 貼方	口縁部摩滅・体部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ	16.4cm	7.4cm	4.0cm	R-263	
5	須恵器坏	ＳＩ190 貼方	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ケズリ	13.8cm	7.4cm	3.1cm	R-264	
6	平瓦（玄関）	ＳＩ190 2層	同面布目	凸面縄叩き→つぶれ					R-162	

第８図　SI 185・190 竪穴住居跡出土遺物



番号	種別	出土区・層	長さ	幅	高さ	備考	図版No.
1	井戸枠	SE84	85.0cm	75.0cm	30.0cm	四隅をほぞで組み、釘止めしている。焼け焦げの痕跡あり。	13-1
2	曲物	SE84	46.0cm		18.6cm	歪んでいる。樹皮綴じ。側面に4個の穴と2個の穴がそれぞれ対になって存在し板があたっていた痕跡あり。	13-2

第9図　SE 84 井戸跡、井戸枠・曲物

ＳＩ190Ａは壁高が10㎝、掘り方を掘り地山土で貼床している。周溝は他の時期の周溝と同時に掘り上げたため全体の様相は分からないが、西・南壁で確認できた。また南東隅で周溝がとぎれる。カマドは北壁にあり燃焼部と煙出しピットを検出し、この位置は最後まで変わらない。燃焼部は掘り方を掘り、地山土と灰黄褐色土を敷いて底面としている。燃焼部に焼面が認められなかったが付近の床面に炭化物の薄く堆積した部分がある。そのほか南西隅に東西約0.5m、南北0.8m、深さ約0.1mの土壙が検出された。

ＳＩ190Ｂは先行するＳＩ190Ａの上に地山土で貼床している。周溝は断面が「Ｕ」形で幅約10㎝、深さ約15㎝、南東隅でとぎれる。また西辺の周溝中に板材の痕跡が確認された。カマドは床面と同じ地山を貼って底面としている。焼け面は検出されず、Ａと同様に付近の床面に炭化物の薄く堆積した部分があった。

ＳＩ190Ｃも先行するＳＩ190Ｂの上に貼床して床面としているがその殆どが削平されている。周溝は北・東壁で確認でき、幅20㎝程、深さ約10㎝で、南東隅でとぎれる。

ＳＩ190Ａの掘り方埋土中から土師器坏(第8図4)・甕、須恵器坏、ＳＩ190Ｂの貼床中から土師器坏・甕、須恵器坏(第8図5)・高台付坏・甕、平瓦(第8図6)・丸瓦、周溝埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏がそれぞれ出土している。

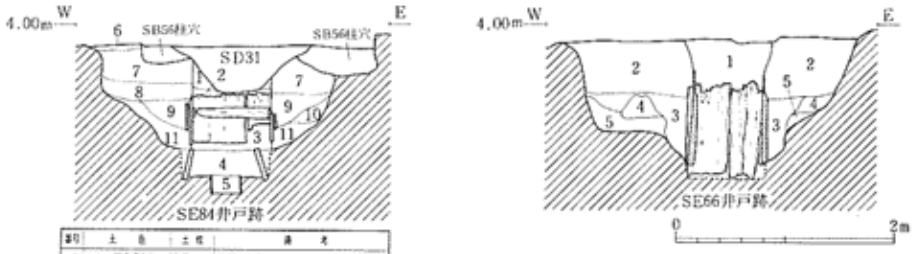
Ｄ．井戸跡

井戸跡はＡ区から3基、Ｂ区から2基検出された。このうち構造が明らかな4基は木組の井戸枠を有し、不明の1基は他の遺構によって上部が壊され、最下部に埋め込まれた曲物のみが残存していた。以下、主なものを説明する。

【ＳＥ66井戸跡】掘り方を掘り、木組の井戸枠を据えた井戸跡である(第10図)。井戸枠の規模は一辺が約0.7m、深さ約1.4mである。構造は四隅に柱を配し、長方形の板材を1面に2枚ずつ縦に並べたものである。並べられた板材の内側には横桟があり、「打抜ほぞ」で組み合わせてある。埋土は地山土や黒褐色土の混入した暗灰黄色土で炭化物を少し含んでいる。

掘り方は上段が歪んだ方形を呈し東西2.8㎜、南北2.6㎜、深さ1.2㎜、下段は円形で直径が約1.3㎜、深さ約0.4㎜ある。埋土は地山土を含んだ暗灰黄色土や黒褐色土である。

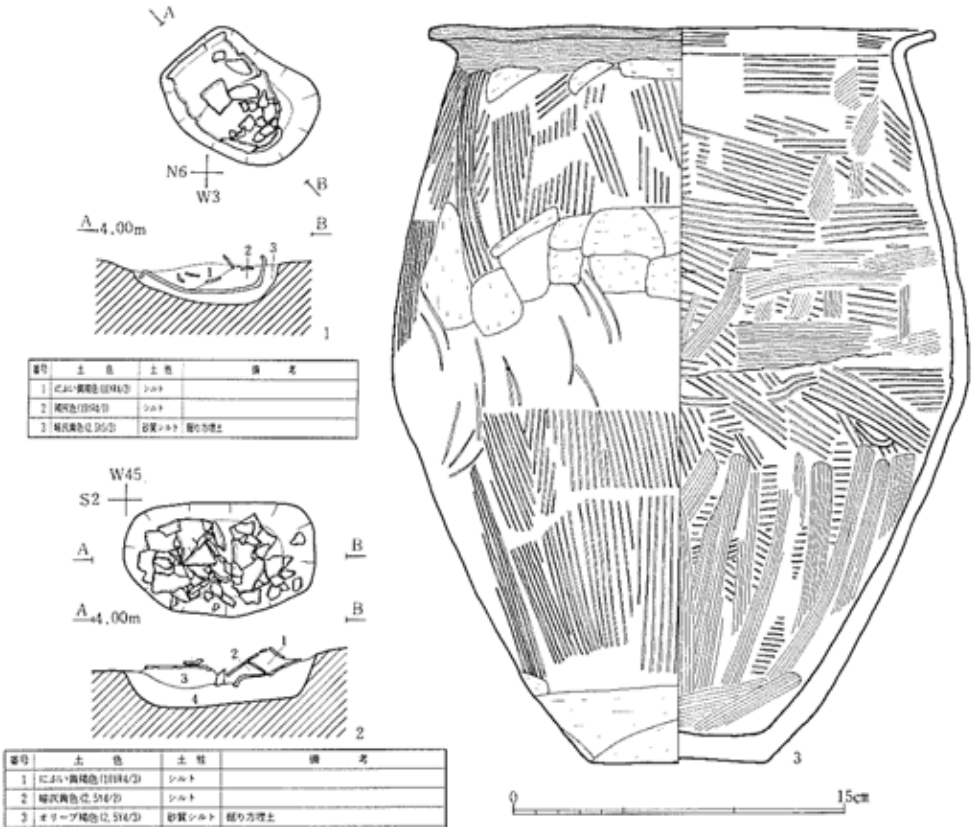
【ＳＥ84井戸跡】掘り方を掘り木組の井戸枠を据えた井戸跡である(第6・10図)。ＳＤ30・31溝跡、ＳＢ56掘立柱建物跡などと重複しこれらよりも古い。井戸枠の規模は東西約0.7m、南北約0.6m、深さ約1.4mである。構造は3つに分けられ、上部は四隅に柱を配し、長方形の板材を1面に2～3枚ずつ縦に並べたものである。並べられた板材の内側には横桟があり「目違いほぞ」や「相欠きぼそ」で組み合わせてある。その下には長方形の板材をひと回り小さく方形に組み(第9図1)、最下部に曲物を埋め込んでいる(第9図2)。埋土は粘性のある黒色土と地山砂である。



番号	土色	土性	備考
1	オリーブ黒色(5Y3/2)	砂質シルト	井戸跡内埋土
2	オリーブ黒色(10Y3/1)	砂質シルト	井戸跡内埋土
3	黒色(2.5Y2/1)	砂	井戸跡内埋土
4	暗灰色(5Y5/1)	砂	井戸跡内埋土
5	暗灰色(5Y5/1)	砂	井戸跡内埋土
6	暗色(10Y4/1)	砂	掘り方埋土
7	黒色(2.5Y2/1)	砂	掘り方埋土
8	黒色(2.5Y2/1)	砂	掘り方埋土
9	オリーブ黒色(10Y3/1)	砂	掘り方埋土
10	オリーブ黒色(10Y4/2)	砂	掘り方埋土
11	黒色(2.5Y2/1)	砂	掘り方埋土

番号	土色	土性	備考
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	井戸跡内埋土
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	掘り方埋土
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土	掘り方埋土
4	オリーブ黒色(10Y3/2)	砂	掘り方埋土
5	オリーブ黒色(10Y3/2)	砂質シルト	掘り方埋土

第10図　井戸跡断面図



番号	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	
3	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	掘り方埋土

番号	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	
3	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	砂質シルト	掘り方埋土
4	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	掘り方埋土

番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	色調%	胎土%
1	土師器甕	SX01	口縁部横ナデ、体部ハケメ	口縁部横ナデ、体部ハケメ・ヘラナデ	手持ちケズリ	23.0cm	8.0cm	33.5cm	5Y-2/2	7-3

第11図　SX 01・133 甕棺墓

掘り方は円形で上段は直径約2.3m、深さ約1.0m、下段は直径0,9m、深さ0.4mで、埋土は砂を多く含んだ褐色土などである。

掘り方埋土中から土師坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕・瓶、平瓦・丸瓦が出土し、このうち土師器はいずれも非ロクロ調整である。井戸埋土中からは土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、平瓦・丸瓦が出土している。

E．甕棺墓

【ＳＸ01甕棺墓】掘り方は楕円形で長軸46㎝、短軸33㎝、深さ25㎝ある。その中に粘土を含んだ暗灰黄色土を約6㎝程敷いて土師器甕1個(第11図3)埋めている(第11図1)。長軸方向はN-43°-Wで、口縁部は北西方向を向いている。

埋められた土師器甕は長胴形で、口縁部が外反し、胴部がやや膨らむもので、口縁部はヨコナデ、胴部はハケメ調整されたものである。

【ＳＸ133甕棺墓】ＳＤ14河川跡除去後の地山面で検出した。掘り方は楕円形で長軸58㎝、短軸34㎝、深さ28㎝ある。その中に地山土を10～18㎝敷いて土師器甕を2個合口にして埋めている(第11図2)。長軸方向はＥ-11°-Nである。

埋められた土師器甕はいずれも長胴形で、上半部がロクロ調整、下半部がヘラケズリ調整されたものである。

F．畝状遺構

畝状遺構は細長く浅い溝が数本平行に並んだもので、溝の方向は南北方向が多い。これらは調査区の中でも標高が低い河川跡の埋土とその周辺、河川跡と思われる堆積層とから18面検出された。遺構の検出面は次のようになる。ＳＤ100河川跡の1層上面でＳＤ50・51・95、ＳＤ100の2層上面でＳＤ188・259、ＳＤ110溝跡の2層上面でＳＤ138、ＳＤ110除去後の地山面でＳＤ130、堆積層1層上面でＳＤ188・259、堆積層2層上面でＳＤ197・202、堆積層3層上面で213・226、堆積層3層除去後の地山面でＳＤ237・262、地山面でＳＤ47・48を確認した。これらのうち、その特徴が最もよく把握できるＳＤ188について説明する。

【ＳＤ188畝状遺構】河川跡の埋土と思われる堆積層1層の上面で検出された小溝群である(第12図)。溝は約1.5m間隔で12条あり、方向はN-7°-Wである。溝の長さは最も長いもので5.9m以上、短いものは1.8m、上幅20～40㎝、下幅10～30㎝、深さ5～10㎝で、埋立は灰白色火山灰の混入した褐色土である。

G．河川跡

A区から河川跡が検出された。この他、B区の北東部に広がる堆積層やSD180溝跡も河川跡の可能性が考えられる。

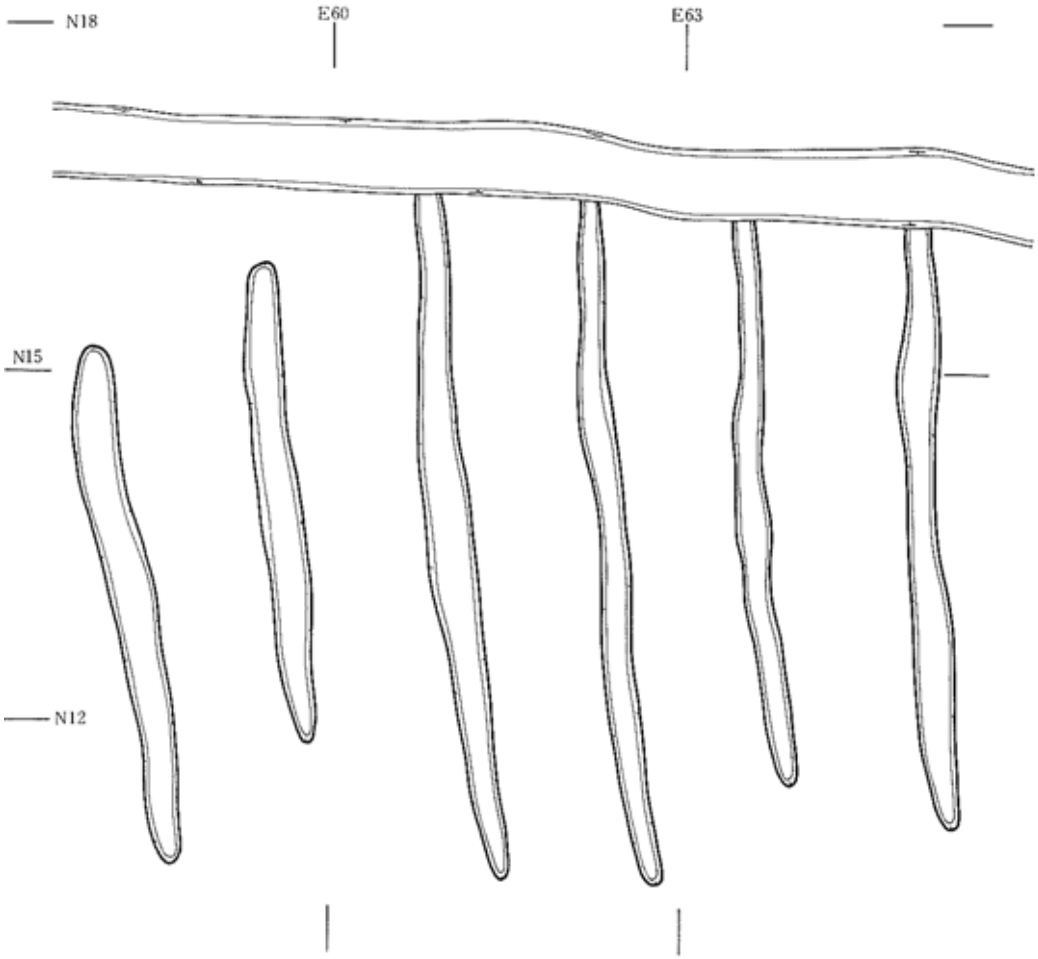
【ＳＤ100河川跡】調査区の西側から北側にかけて東流する河川跡が検出された。河川跡は土

砂の堆積を繰り返しながら浅くなり、河川としての機能が停止する。その跡にはくぼみが残り、主に生産活動の場として活用されている。

河川は上幅5.0m程、下幅3.5m程、深さ約1.0mで、埋土(4～6層)は砂を多く含んだ粘性のある黒褐色土や砂を多く含んだ黄褐色土の自然堆積である。

河川跡のくぼみは上層がＳＤ14、下層がＳＤ100の1～3層で、本来は同一のくぼみであるが便宜的に遺構番号を変えて調査を行った。なお、この上層と下層の間には承平4年(934年)直前に降下した灰白色火山灰(白鳥：1980)が間層として堆積している。

上層(ＳＤ14)の埋土は粘性のある黒褐色土や暗褐色の自然堆積土である。

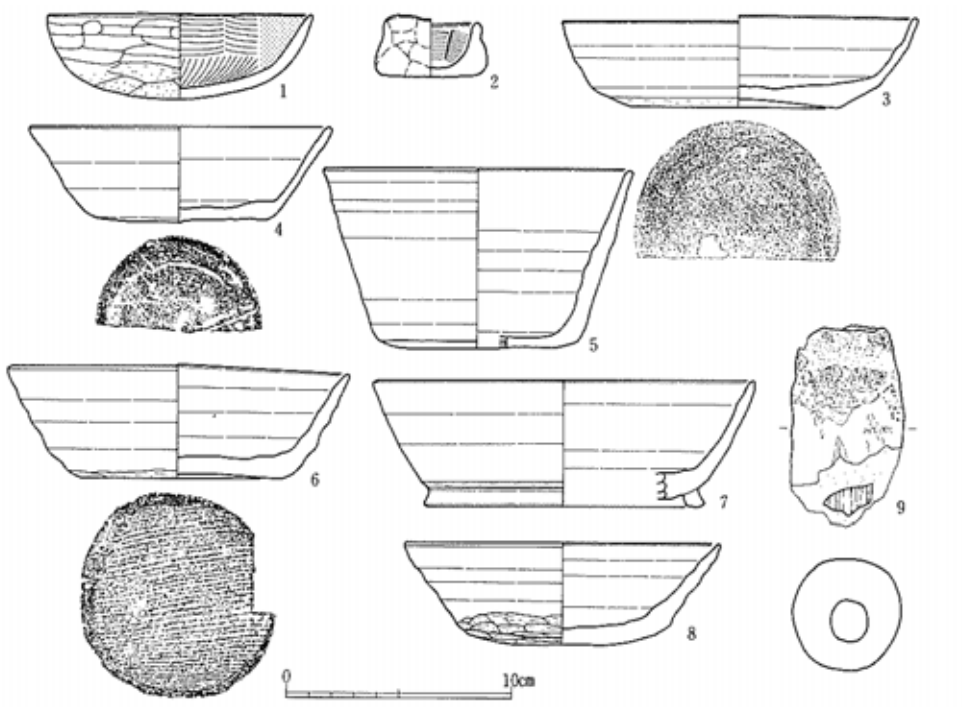


第12図　SD 188 畝状遺構平面図

1層埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕・瓶、赤焼土器坏、平瓦・丸瓦が出土している。2層埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕、平瓦・丸瓦が出土しいる。

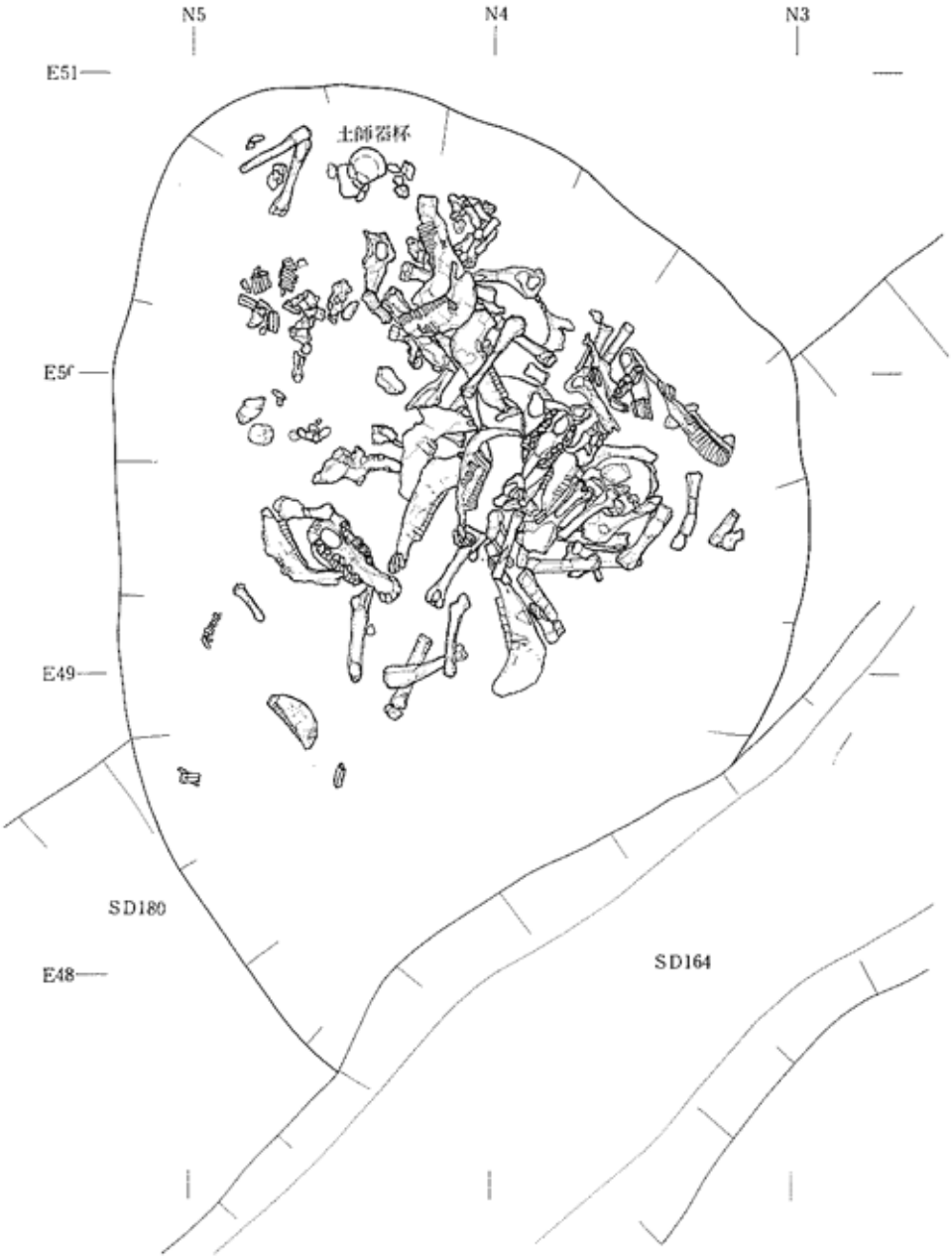
下層(ＳＤ100の1～3層)の埋土は褐色の自然堆積土である。なお、各層上面で畝状遺構、溝跡、土壙、ピットなどが検出された。

1層埋土中から土師器坏(第13図1・2)・高台付坏・甕・壷・甑、須恵器坏(第13図3・4)・高台付坏・蓋・甕・瓶・鉢、平瓦・丸瓦・軒丸瓦、鞴羽口が出土している。土師器は全て非ロクロ調整のものであり、平瓦・丸瓦は多賀城政庁第Ⅱ期以前のものである。また漆紙文書が出土しており(図版10－1)、文字の半読結果は次の通りである。



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	土師器坏	ＳＤ100 1層	口縁部ヘラミガキ、体部手持ちケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ	11.8cm	7.0cm	3.5cm	R-33	
2	土師器坏	ＳＤ100 1層	指頭によるオサエ	ヘラナデ	ナデ	4.0cm	4.2cm	2.4cm	R-64	6-14
3	須恵器坏	ＳＤ100 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ケズリ	15.8cm	9.2cm	3.8cm	R-258	
4	須恵器坏	ＳＤ100 1層	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	13.4cm	7.4cm	3.9cm	R-243	8-6
5	須恵器坏	ＳＤ100 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちケズリ	13.8cm	7.0cm	7.4cm	R-256	
6	須恵器坏	ＳＤ100 2層	ロクロナデ→体下部手持ちケズリ	ロクロナデ	糸止め切り→手持ちケズリ	15.2cm	9.0cm	4.6cm	R-174	8-2
7	須恵器高台坏	ＳＤ100 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ケズリ	17.0cm	12.0cm	5.2cm	R-259	
8	須恵器坏	ＳＤ100 3層	ロクロナデ→体下部手持ちケズリ	ロクロナデ	糸止め切り→手持ちケズリ	14.0cm	4.0cm	4.2cm	R-252	8-7
9	鞴羽口	ＳＤ100 3層	火熱のため不明	貫通穴内に煤痕					R-151	11-1

第13図　SD 100 河川跡出土遺物



第14図　SX 200 ウマ集積遺構平面図

×□年廿四歳×

×□自賣年七×

〔刀カ〕

×賣年六□×

〔歳カ〕

2層埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏(第13図5・6)・高台付坏（第13図7)・蓋・甕・瓶、平瓦・丸瓦、鞴羽口が出土している。3層埋土中から土師器坏・甕、須恵器坏(第13図8)・高台付坏・甕・瓶、平瓦・丸瓦、鞴羽口(第13図9)が出土している。

H.その他の遺構

【ＳＸ200ウマ集積遺構】東西3.0m程、南北2.0m程の不整円形の浅いくぼみから多量のウマの骨が出土した(第14図)。ＳD164・180溝跡と重複し、ＳD164より古く、ＳD180より新しい。まだ詳細は不明であるが、現段階での観察結果は次の通りである。骨は頭蓋・頚椎・四肢骨のみで胴骨は認められない。その中で頭蓋とりわけ下顎骨が多く8体分を数える。集積状況はおよそ上部に頭蓋・頚椎、下部に四肢骨が多く見られ、しかも四肢骨の中には上腕骨～中手骨・大腿骨～中足骨が規則正しい配列のもとに検出されているものもある。この他、イヌと思われる下顎骨もあった。これらの骨とともに土師器坏(第17図2・3)が出土している。なお、このような遺構のあり方は極めて例の少ないもので、研究等の資料として保存する必要性が高まり、東北歴史資料館の協力を得て遺構の切り取りが行われた。

2．中世

中世では堀で囲まれた屋敷跡、掘立柱建物跡5棟以上、井戸跡1基、溝跡、土壙などが検出された。

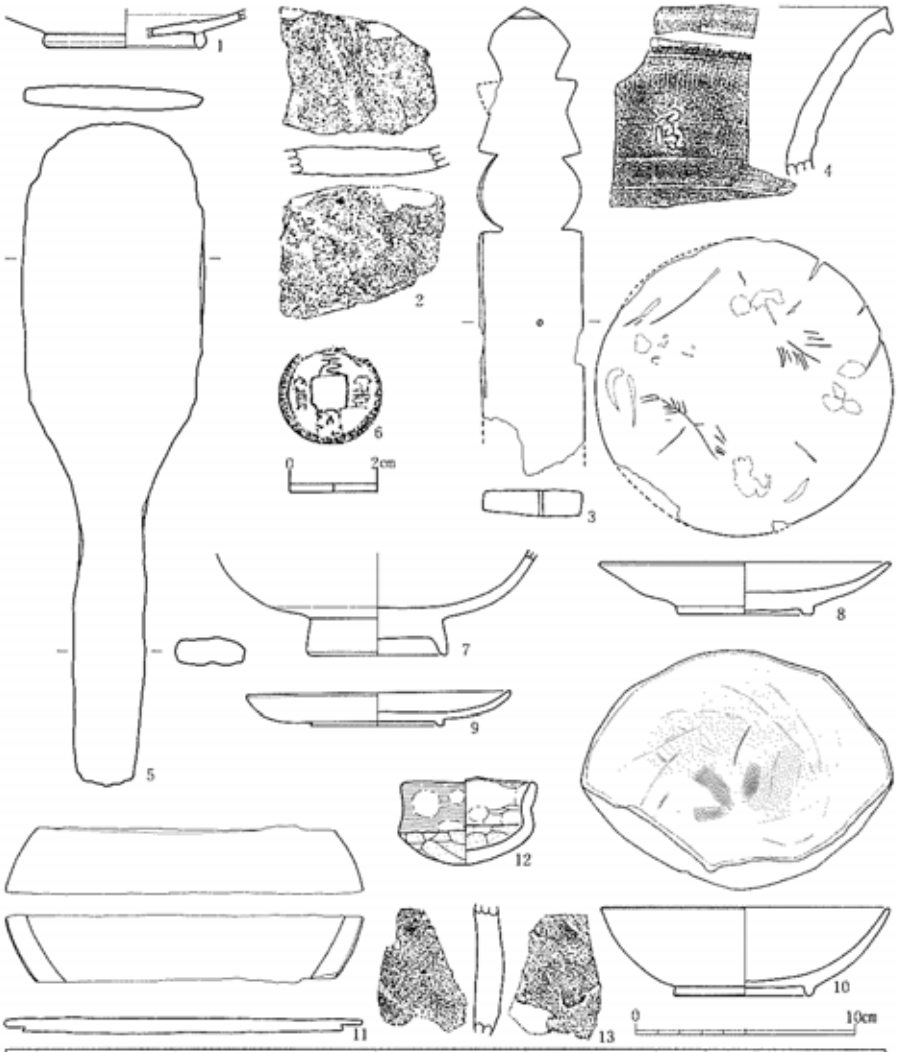
A．屋敷跡

【ＳD20Ａ・20Ｂ・27・28・29溝跡】屋敷を区画する堀跡である(第2図)。調査では「コ」形に検出され、さらに調査区外に延びており、全体形としては方形になるものと思われる。長さは北辺が51m、東辺が9m以上、西辺が34m以上ある。また堀は西辺で4条検出されたことから、この屋敷跡には最低4時期の変遷が考えられる。

北辺の堀はＳD27で、北にやや膨らんだ形である。ＳD28との交差地点から東辺までの長さは43m、ＳD20Ｂの交差地点から東辺までの長さは51mである。上幅4.0～4.6m、下幅約1.6～2.8m、深さ0.8m程で、埋土は粘性のある黒褐色の自然堆積土であ。

埋土中から多くの古代の土器や瓦の他に中世陶器の甕(常滑産)(第15図2)・皿（美濃産）(図版11-24)、磁器、塔婆(第15図3)が出土している。

西辺の堀は東からＳD29、28、20Ａ、20Ｂで、重複から(旧)ＳD29→(新)ＳD28、(旧)ＳD



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	灰釉陶器皿	SD20	灰釉	灰釉			7.0cm		R-7	
2	中世陶器大甕	SD27	ナデ	ナデ					R-126	11-22
4	国産陶器	SD28 1層	平行叩き→ロクロナデ ヘラ書「宮」	ロクロナデ					R-124	10-7
7	漆器椀	SD28	黒漆塗り。朱漆で文様	黒漆塗りの地に朱漆塗り	ケズリ、見込みに朱漆		6.4cm			
8	漆器皿	SD28 2層	黒漆塗り。	黒漆塗りの地に朱漆で文様		13.4cm	6.0cm	2.4cm		13-4
9	漆器皿	SD28 2層	黒漆塗り。	黒漆塗りの地に朱漆で文様	ケズリ	12.0cm	6.0cm	1.5cm		
10	漆器椀	SD28 2層	黒漆塗り。朱漆で文様	黒漆塗りの地に朱漆で文様		13.2cm	6.4cm	4.1cm		13-5
12	土師器杯	SD150 1層	口縁部横ナデ→オサエ、体部手持ちケズリ	オサエ→手持ちケズリ	手持ちケズリ	6.0cm	2.0cm	3.9cm	R-51	6-15
13	中世陶器大甕	SD40 2層	ナデ	ナデ					R-267	

番号	種別	出土区・層	材質	備考	図版No
6	元豊通寶	SD28 1層	銅	摩滅著しい	11-2

番号	種別	出土区・層	長さ	幅	厚さ	備考	図版No
3	砥石	SD27 2層		4.7cm	1.2cm	頂部のみ	
5	ヘラ	SD28 2層	30.3cm	6.2cm	1.1cm		13-9
11	曲物の底板	SD150 2層	16.4cm		0.7cm	複数の切離あり	

第15図　溝跡出土遺物

20A→(新) ＳＤ20Ｂという2つの新旧関係をとらえることができた。埋土の状況はＳＤ28・29が埋め戻されており、ＳＤ20Ａ・Ｂは自然堆積である。以上の事実からＳＤ28を埋め戻して、ＳＤ20Ａに作り替えたという過程を推定できる。すなわち古い順にＳＤ29→ＳＤ28→ＳＤ20Ａ→ＳＤ20Ｂと変遷すると思われる。以下、古い順に説明する。

ＳＤ29は長さ16m、上幅約3.2m、下幅1.7～2.2m、深さ0.6m程で、地山ブロックを多く含んだ黄褐色土やスクモ層を含んだ暗褐色土で人為的に埋め戻されている。

ＳＤ28は長さ34m、上幅約4.8m、下幅1.9～2.9m、深さ0.7m程で、埋土はＳＤ29との交差地点付近を境に、北側は下層でグライ化している黒褐色の自然堆積土などで、南側は黒褐色土で人為的に埋め戻されている。埋め戻された土の間には細長い草を敷き詰めた跡が認められた。埋土中から漆器椀(第15図7・10、図版13-8)・皿(第15図8・9)・蓋、木製のヘラ(第15図5)、桶の底板が一括で出土した。この他、元豊通宝(第15図6)、多量の古代の土器や瓦なども出土している。

ＳＤ20Ａは後続するＳＤ20Ｂとほぼ同位置にあり、Ｂによって多くを壊されている。

ＳＤ20ＢはＳＤ28・29の西側に位置し、長さ34m、上幅3.2～5.6m、下幅0.5～1.2m、深さ0.7m程で、Ａ・Ｂとも粘性のある黒褐色の自然堆穫土である。埋土中から灰釉陶器皿(第15図1)などが出土している。

【ＳＤ31・40溝跡】屋敷堀の内側にあり、これにほぼ平行するように巡る小溝である。「コ」形に検出され、さらに調査区外へ延び、長さは北辺で34m、西辺で29m以上ある。ＳＤ27やＳＤ29とは3m程の距離にあり、その間に施設等は検出されなかった。また溝は相対的な位置関係からＳＤ29の時期に機能していたものと考えられる。溝は北辺・東辺でＳＤ40、西辺でＳＤ31になる。

ＳＤ40は上幅約2.0m、下幅約0.8m、深さ0.6m程である。埋土は黄灰色の自然堆積土の上に地山ブロックを含んだ黒褐色土で人為的に埋め戻されている。埋土中から漆器鉢、中世陶器の甕(常滑産)(第15図I3)が出土している。

ＳＤ31は上幅約1.5m、下幅約0.5m、深さ0.3m程である。埋土は黄褐色土や植物遺体を含んだ黒褐色土で人為的に埋め戻されている。

【ＳＤ150溝跡】ＳＤ150はＳＤ27よりも古く、東西方向へ延びる区画溝で調査区外へさらに続く。長さ44m以上、上幅1.9～2.5m、下幅約0.7m、深さ0.7m程で、粘性のある黒褐色の自然堆積土である。埋土中から漆器椀(図版13-7)、曲物の蓋板(第15図11)が出土している。

【ＳＤ05溝跡】ＳＤ27の西端でこれに直交して北へ延びる溝で、ＳＤ27と同時に埋まっている。規模からみて別の区画溝とは考えにくく、ＳＤ27やＳＤ20の排水のための溝かと考えられる。上幅は1.2m程、下幅0.3m程、深さ0.4m程で、埋土はにぶい黄褐色土と砂を多く含んだ黄灰

色粘土の自然堆積である。

B．掘立柱建物跡

屋敷跡内には多数の柱穴が発見された。そのうちの1個からは紹聖元宝(北宋銭)が出土しており、中世の建物が存在したことは十分に考えられ、確証はないもののＳＢ303・304・305・306・307がこの時期に含まれる可能性を持つ。

【ＳＢ303掘立柱建物跡】桁行4間、梁行2間の東西棟で、ＳＢ304と重複しこれよりも新しい。柱間は桁行が北側柱列で東から1.5m・1.6m・1.8m・1.8mで、梁行が東妻で北から1.7m・2.3mである。建物の方向は北側柱列でＥ-2°-Ｓである。柱穴は方形や円形で一辺が0.4m程、深さ0.5m程で、埋土は地山土を多く含む黒褐色土である。柱痕跡は直径が約I0㎝の円形である。また柱穴から土師器坏(第17図1)が出土した。

【ＳＢ304掘立柱建物跡】桁行2間、梁行1間の南北棟で、柱間は桁行が東側柱列で北から2.0m・1.6m、梁行が南妻で2.2mある。建物の方向は東側柱列でN-3°-Eである。柱穴は方形で一辺が0.4m程、深さ0.5m程で、埋土は地山土を多く含む黒褐色土である。柱痕跡は直径が約15㎝の円形である。

【ＳＢ305掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、ＳＤ30溝跡と重複しこれよりも古い。柱間は南側柱列で東から2.3m・1.9m、東側柱列で北から2.1m・1.6mあり、建物の方向は東側柱列でN-4°-Eである柱穴は方形や円形で一辺が0.4m程、深さ0.3m程で、埋土は黒褐色土とにぶい黄褐色土である。柱痕跡は直径約15㎝の円形である。

【ＳＢ306掘立柱建物跡】桁行2間、梁行2間の平面形がほぼ正方形の建物で、柱間は北側柱列で東から1.5m・1.9m、西側柱列で北から1.4m・1.7mである。建物の方向は北側柱列でＥ-5°-Nである。柱穴は方形や円形で一辺が0.4m程、深さ0.3m程で、埋土は黒褐色土とにぶい黄褐色土である。柱痕跡は直径15㎝程の円形である。

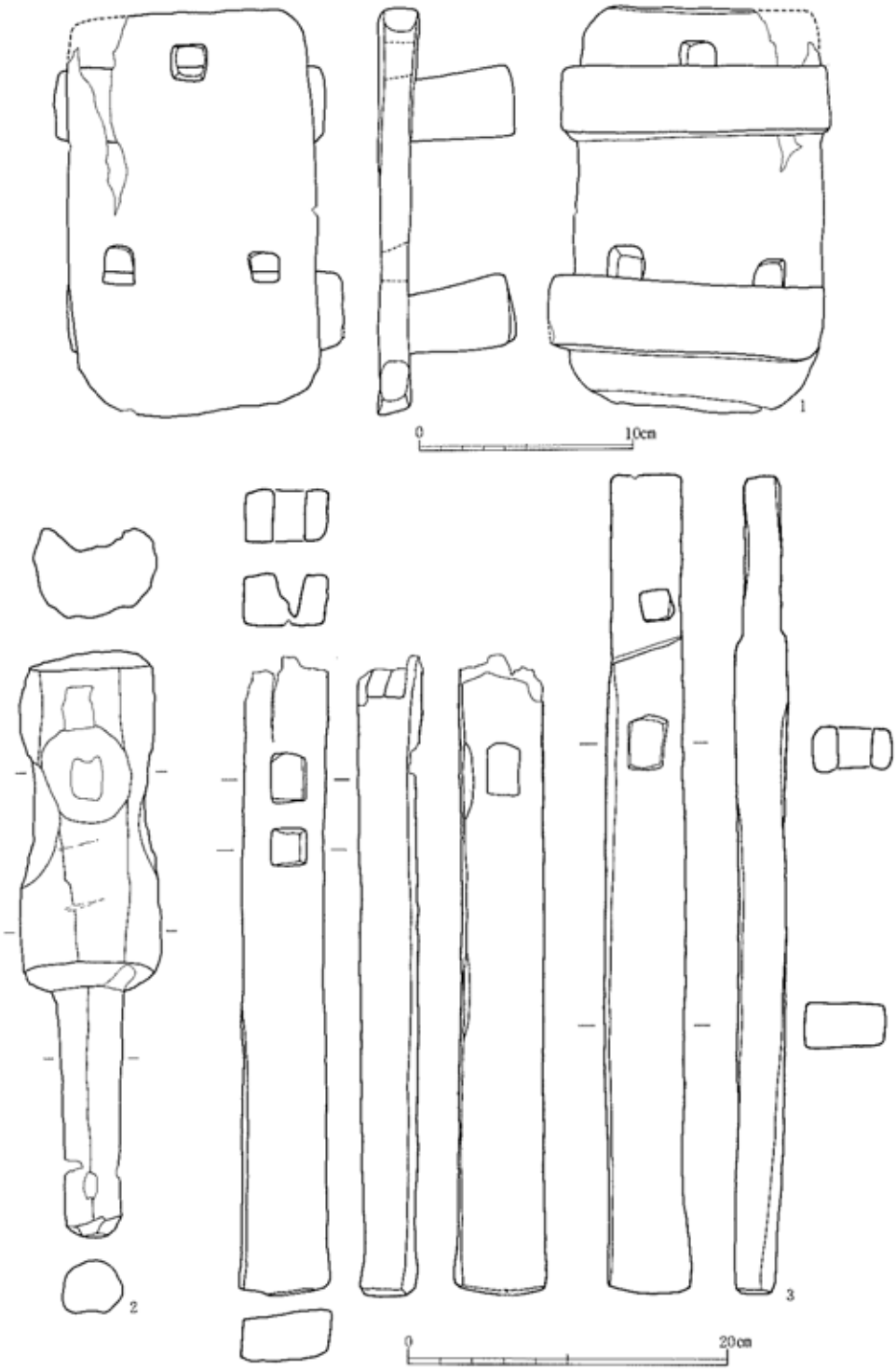
【ＳＢ307掘立柱建物跡】桁行2間、梁行1間の東西棟で、柱間は桁行が北側柱列で2.1m等間、梁行が3.9mある。建物の方向は北側柱列でＥ-1°-Ｓである。柱穴は円形や方形で一辺が0.4m程、深さ0.4m程で、埋土は黒褐色土とにぶい黄褐色土である。柱痕跡は直径が約15㎝の円形である。

C．井戸跡

【ＳＥ93井戸跡】屋敷跡内から検出された。円形で直径が1.5m、深さ1.3mの素掘りの井戸である。埋土は地山ブロックを含んだ黒色粘土で炭化物や木片が混じる。

D．土壙

【ＳＫ33土壙】ＳＤ28が埋め戻された後に掘られた土壙で、北側部分を検出した(第6図)。規模は東西4.9m、南北2.4m以上、深さ1.1m、埋土はしまりのない粘土質で、黄色色や黒褐



第16図　SK 33 土壙出土遺物

色の自然堆積土である。また植物遺体や炭化物が混じる。出土遺物は漆器椀、木製品、磁器(中国産)(図版11-26・27)が出土している。木製品には俵編機の脚(第16図3、図版12-10)、つつろ(俵編機のおもり)(図版12-7～9)、砧(第16図2、図版12-11)、下駄(第16図1、図版12-6)、曲物の側板、シカの角等があり、これらは一括投棄されたものである。

3．近世

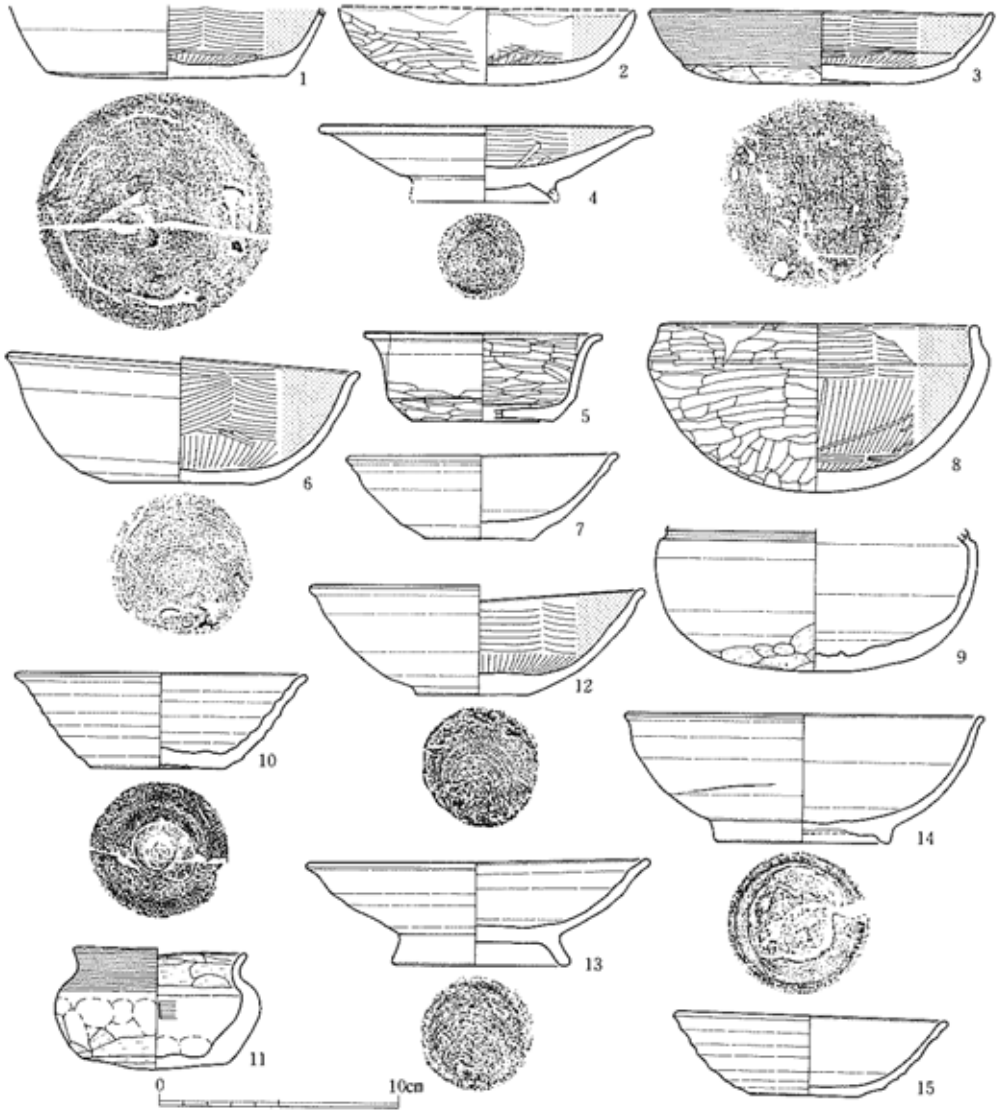
近世に属する遺構としては墓跡が7基検出された。A区からは5基が東西に並び、そのうち木棺墓4基、土壙墓1基である。木棺墓は桶型と箱型がある。B区からも2基が東西方向に並んで見つかっており、これらは土壙墓と思われる。副葬品は寛永通宝、キセル、漆器椀、木製櫛、竹製数珠などがある。これらの中で最も残存状態が良好なＳＸ65について説明する。

【ＳＸ65墓跡】ＳＤ27溝跡と重複しこれより新しい。木棺墓のうち箱型に分類されるものである。掘り方は方形で東西86㎝、南北90㎝、深さ78㎝、埋土は地山ブロックを多く含んだ灰黄褐色土である。掘り方埋土中から折敷が2点、重なるように出土した。木棺は東西58㎝、南北66㎝、高さ61㎝で、材料は長方形の板材を用い、鉄製角釘で組み立てている。棺内には人骨が遺存し、南を向いた姿勢である。副葬品は蓋の上に木製櫛が載せられ、棺内に寛永通宝16枚、キセル、ヘラ状木製品、杖、竹製数珠が納められていた。

4．その他の遺物

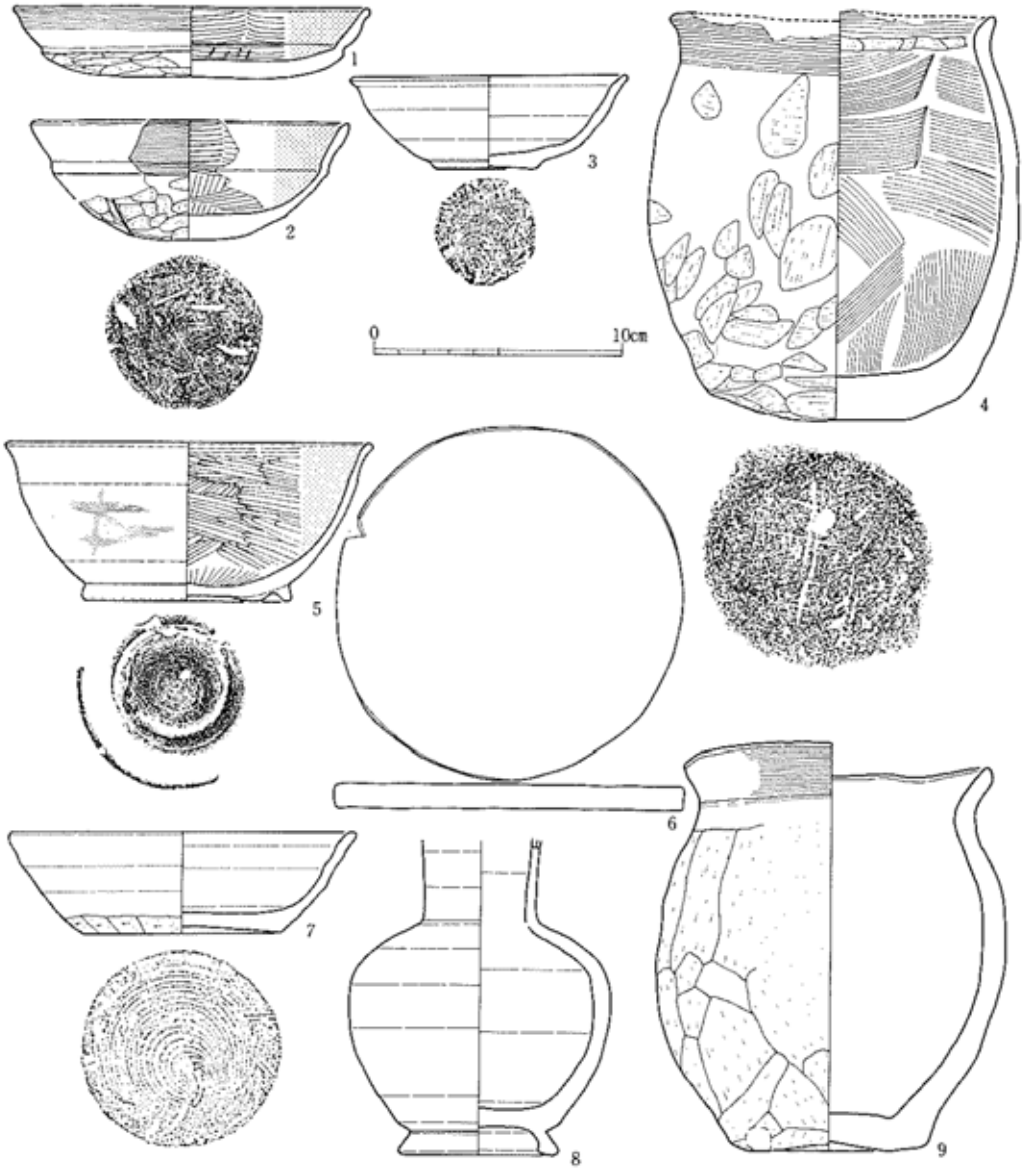
その他の遺構や表土等からも数多くの遺物が出土している。土師器には坏(第17図6・8・12、第18図1・2、第19図1、図版6-1・2・8・9)・高台付坏(第18図5)・高台付皿(第17図4)・高坏(図版7-5)・蓋・甕(第18図4・9、第19図3、図版6-12)・壷(図版7-6)がある。須恵器には坏(第17図5・10、第18図7、図版8-4)・高台付坏(第19図2、図版8-8)・蓋・甕・瓶・壷(第17図9、第18図8)・甑・円面硯・風字硯(図版8－12)がある。赤焼土器には坏(第17図7・15、第18図3)・高台付坏(第17図13・14)がある。瓦には平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦がある。これらの中には墨書されたもの(図版10-3～6・8)、ヘラ書きされたもの(第15図4、第19図4)、内面に漆が付着したもの(第18図9、図版10-2)がある。その他に緑釉陶器(図版9-14)・灰釉陶器(図版9-9～13)・中世の陶磁器(第19図7、図版11-20・25)が出土している。

B区西側で深掘りした排水溝より木簡が出土している(第19図8)。この耕水溝はＳＤ205溝跡やＳＤ100河川跡と関連しているが、どの遺構になるかは限定できない。なお文字の判読は次の通りである。



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	土師器坏	SB303	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ		10.0cm		R-109	
2	土師器坏	SX200	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ	12.0cm	4.0cm	3.2cm	R-208	
3	土師器坏	SX200	口縁部横ナデ、体部ケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ	14.4cm	7.4cm	3.1cm	R-207	
4	土師器高台脚	SK254	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.0cm	6.0cm	3.3cm	R-110	6-11
5	須恵器坏	SK43	ロクロナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転ケズリ	10.0cm	6.0cm	3.8cm	R-69	
6	土師器坏	SX135 底面	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.8cm	6.0cm	5.5cm	R-46	6-4
7	赤焼土器坏	SX135底面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	11.4cm	4.5cm	3.5cm	R-49	9-1
8	土師器坏	SK144	ヘラミガキ、部分的に黒色化	ヘラミガキ・黒色処理		13.0cm	3.0cm	7.1cm	R-61	
9	須恵器鉢?	SK144	ロクロナデ→手持ちケズリ	ロクロナデ	手持ちケズリ		4.0cm		R-68	
10	須恵器坏	SD202-f	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	12.2cm	5.4cm	4.0cm	R-122	
11	須恵器鍋	SD168 2層	口縁部横ナデ、体部オサエ・手持ちケズリ	口縁部手持ちケズリ、体部ナデ	手持ちケズリ	7.2cm	6.2cm	5.1cm	R-158	8-5
12	土師器坏	SD90 1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.0cm	4.8cm	4.6cm	R-4	6-7
13	赤焼土器高台坏	SD90	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	14.4cm	6.9cm	4.3cm	R-25	9-7
14	赤焼土器高台坏	SD53 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	15.0cm	7.0cm	5.4cm	R-27	9-8
15	赤焼土器坏	SD53 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	11.0cm	4.4cm	3.4cm	R-28	

第17図　その他の遺構・表土など出土遺物（1）



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	土師器坏	SD164	口縁部横ナデ、体部手持ちケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ	14.4cm	6.0cm	2.8cm	R-134	6-3
2	土師器坏	SD110 3層	口縁部横ナデ、体部手持ちケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちケズリ　ヘラ書「メ」	12.8cm	4.0cm	4.8cm	R-62	
3	赤焼土器坏	SD124 2層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	11.2cm	4.0cm	3.7cm	R-155	9-2
4	土師器甕	SD164	口縁部横ナデ、体部手持ちケズリ	口縁部横ナデ、体部ヘラナデ	手持ちケズリ	13.1cm	5.0cm	16.5cm	R-006	7-2
5	土師器高台坏	SD107	ロクロナデ・墨書	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.8cm	8.2cm	5.4cm	R-23	6-10
7	須恵器坏	SD112 2層	ロクロナデ→手持ちケズリ	ロクロナデ	回転糸切り→手持ちケズリ	14.0cm	8.0cm	4.2cm	R-115	8-3
8	須恵器壺	SD108 1層	ロクロナデ	ロクロナデ			6.0cm		R-139	8-10
9	土師器甕	SD98 2層	口縁部横ナデ、体部手持ちケズリ	全面煤付着	手持ちケズリ	12.4cm	7.9cm	16.5cm	R-50	7-1

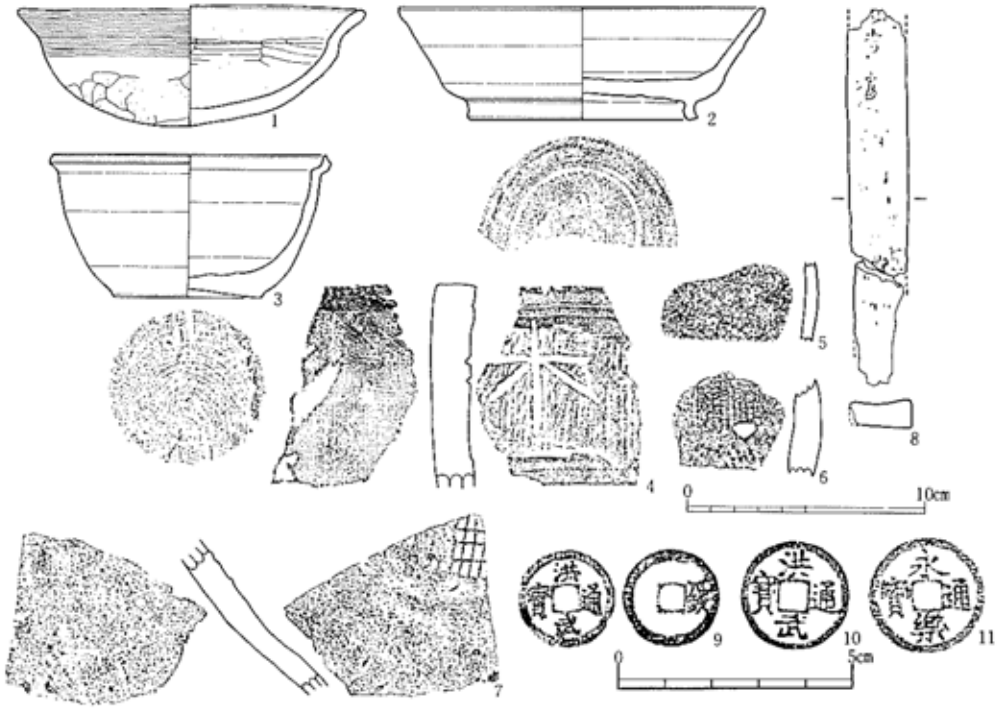
番号	種別	出土区・層	備考
6	曲物の底板	SD99	直径14.0cm　厚さ1.0cm

第18図　その他の遺構・表土など出土遺物（2）

×「□□古古□」×

×□貴遣□□□□×

また鉄製品では刀子・釘・鉄鏃・鉈、銅製品では耳環(図版11-21)・キセルが出土している。土製品では勾玉(図版11-5・6)・土錘・カマド支脚（図版11-3）・円盤状土製品(図版11－8～10)・ミニチュア土器(第15図12、第17図11)が出土している。石製品では勾玉（図版11－15）・臼玉（図版11－17）・石製模造品(図版11－11～14)・砥石・石臼が出土している。古銭類では洪武通宝(第19図9・10)・永楽通宝(第19図11)・寛永通宝が出土している。木製品では漆器椀(図版13－6)、曲物の底板（第18図6）が出土している。その他、縄文土器片(第19図5・6)、石器（石匙・剥片）、鉄滓(図版11－7)、ウマの骨（図版12－1）が出土している。



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径	底径	器高	登録No	図版No
1	土師器坏	地山	口縁部横ナデ、体部手持ちケズリ	ヘラミガキ	手持ちケズリ	14.6cm	3.0cm	5.1cm	R-6	7-4
2	須恵器高台坏	1層	ロクロナデ	ヘラナデ	回転ケズリ	15.4cm	9.4cm	4.7cm	R-14	
3	土師器甕	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	11.4cm	6.0cm	6.0cm	R-114	6-13
4	丸瓦	1層	凸面縄叩き→ロクロナデ　ヘラ書「大」	凹面布目					R-30	
5	縄文土器	地山の砂層	摩滅により原体不明	摩滅により不明					R-199	11-18
6	縄文土器	SD114　1層	摩滅により原体不明	摩滅により不明					R-102	11-19
7	中世陶器	1層	ナデ	ナデ					R-217	11-23

番号	種別	出土区・層	備考	図版No
8	木製	1層	上下端欠損　幅2.6cm　厚さ1.1cm　劣化著しい	10-9

番号	種別	出土区・層	材質	備考	登録No	図版No
9	洪武通宝	1層	銅	背に「一線」	R-328	12-5
10	洪武通宝	1層	銅		R-329	12-4
11	永楽通宝	1層	銅		R-331	12-3

第19図　その他の遺構・表土など出土遺物（3）

Ⅳ．遺構の検討とまとめ

1．古代

古代の遺構は前述した通りである。ここでは道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、SX200ウマ集積遺構について検討を加え、その後に主な遺構の年代を述べたい。

A．道路跡

今回の調査ではＳＸ300東西道路跡とＳＸ299南北道路跡とが見つかり、調査区の中央部で交差する。両道路跡は3時期の変遷があり、ほぼ同位置で側溝の作り替えが行われている。ＳＸ300は路幅は3～5mで若干の歪みがあるものの、ほぼ直線的に延びている。ＳＸ299はC期ではほぼ直線的に延びるのに対し、Ａ・Ｂ期において調査区の北端で東に緩やかにカーブする。路幅等は検出部分が少ないため不明である。両道路跡の存続年代は平安時代の前半頃で、そのうちＢ期では灰白色火山灰が側溝に堆積していることから10世紀前半頃に位置付けられる(白鳥；1980)。

次に多賀城近辺で見つかった道路跡の関係を述べる。現在確認されているのは新田遺跡北寿福寺地区(多賀城市埋蔵文化財センター；1988)の東西道路跡、山王遺跡東町浦地区(相沢；1989)の東西道路跡と南北道路跡、多賀城跡第37次発掘調査(白鳥；1981)の南北道路跡、市川橋遺跡伏石地区(高倉・滝口・石本；1983)の南北道路跡と山王遺跡八幡地区試掘調査(鈴木；1988)の南北道路跡である。これらの道路跡についてその特徴を下の表にまとめた。

	道跡名	路幅 (m)	本遺跡との距離	方向	年代	備考
東西道路	山王遺跡東町浦地区	12(心心で約15)	約2町	多賀城跡外郭南辺に平行	9～10世紀頃	
	新田遺跡北寿福寺地区	11.5～12.0(心心で13.5)		E-15°-N	9世紀頃	
	山王遺跡八幡地区	心心で3～5		E-3°-S	平安時代前半頃	
南北道路	山王遺跡八幡地区試掘調査	4.5	約1町	N-5°-E	平安時代前半頃	
	多賀城跡第37次調査	約5.4(心心で約8.1)	約3町	多賀城跡政庁中軸線に平行	10世紀前半～11世紀頃	
	市川橋遺跡伏石地区	2.8～4.1	約2.5町	多賀城跡政庁中軸線に平行	10世紀前半以前	側溝を持たない
	山王遺跡東町浦地区	3	約4.5町	不明	9～10世紀頃	
	山王遺跡八幡地区	不明		N-6°-E	平安時代前半頃	

多賀城周辺の道路跡集成表

道路跡は東西道路が3条、南北道路が5条確認されており、位置は多賀城跡の南西面、七北田川や砂押川の自然堤防上に集中している。路幅は4m前後のものと13m前後になるものと

があり、後者は本遺跡を除いた東西道路である。年代は全てが平安時代前半頃である。

道路跡の方向では、ⓐ真北に対してやや東に偏する方向を基準とするものと、ⓑこれらとは大きく方向を異にするものとがある。なお、ⓐに関しては多賀城跡外郭南辺に一致するとされているものと多賀城跡政庁中軸線に一致するとされているものとがあるが、それぞればらつきがあり誤差等も考えると両者を区別することは難しくここではまとめて考えることとした。発見された道路跡のうちで新田遺跡北寿福寺地区の道路跡以外は全てⓐに含まれる。

次に本遺跡との距離に関して見ると、東西道路については山王遺跡東町浦地区の道路跡とは約2町(1町を109㎡として計測する)あり、南北道路については山王遺跡八幡地区試掘調査の道路跡とは約1町、第37次発掘調査の道路跡とは約3町である。この他、市川橋遺跡伏石地区の道路跡とは約2.5町、山王遺跡東町浦地区の道路跡とは約4.5町である。

以上のように、各道路跡間には方向や距離に関連性が強く認められ、平安時代頃には多賀城の周辺に計画的な地割りが存在し、少なくとも1町毎に通路がつけられた可能性が考えられる。しかしながら、まだ道路跡の検出例は少なく全容は不明で、今後の資料の増加を待たなければならない。なお、奈良時代の道路は未検出であるが、竪穴住居跡や掘立柱建物跡には方向に規則性があることから、奈良時代には既に計画的な地割りが存在した可能性がある。

Ｂ．掘立柱建物跡

古代に属する掘立柱建物跡は17棟以上確認された。これらを場所的に見ると①A区の北西部、②A区の南部、③B区の北西部、④B区の北東部と大きく4箇所に偏在して検出され、比較的標高の高い場所を選択しているが、例外としてＳB245・246は河川跡のくぼみと思われる堆積層中に建てられている。建物の規模が明らかなものは桁行4間×梁行2間(ＳB56)、3間×2間(ＳB81・140・141・318)、2間×2間(ＳB228・246・263・314、314は総柱)があり、3間×2間と2間×2間が多く、概して規模の小さいものである。棟方向は東西棟と南北棟がほぼ同数で、柱間にはばらつきが目立ち規則性は見出せない。建物の方向は真北に対して東へ若干偏するもの(ＳB02・56・228・260・263)と、西へ若干偏するもの（ＳB81・140・141・245・246・318・319・320）と、西へ大きく偏するもの(ＳB314)とがあり、数的には西へ若干偏するものが多い。また柱穴の規模に関しては一辺が0.6m前後の方形を呈する比較的大きめのもの(ＳB02・56・81・140・141・228・318・319)と、0.3m前後の円形や方形を呈する小さなもの(ＳB245・246・260・263・314・320)とがある。

年代の特定できる建物跡は以下の通りである。

奈良時代：ＳB140・141・245・246・319・320

奈良～平安時代前半頃：ＳB228

平安時代：ＳB56

この中で建物数の多い奈良時代についてその特徴を述べたい。位置的にはA区の北西部・南部、B区の北東部の3か所に各々2棟ずつ散在している。個々に見るとＳB245とＳB246Ａ・Ｂとは検出面が異なるため同時に存在はせず（古い順にＳB246Ａ・Ｂ→ＳB245）、ＳB319とＳB320とは重複関係にあるためこれも同時に存在はしない(新旧関係は不明)。またＳB140とＳB141Ａ・Ｂは距離が約1.0mとごく近く、同時に存在はしないと思われる。したがって、それぞれの場所で1棟ずつ2時期以上の変遷があったものと考えられる。

規模が明らかな建物は桁行3間×梁行2間と2間×2間とがあり、棟方向は東西棟と南北棟とが同数である。建物の方向は全てが真北に対して若干西へ偏しており規則性が認められる。柱間は不揃いで、柱穴には比較的大きなものと小さなものとが混在している。

以上のように、奈良時代の掘立柱建物跡は小規模で散在しながらも方向に規則性が認められた。

Ｃ．竪穴住居跡

竪穴住居跡は4軒検出され(ＳＩ235は未調査)、いずれも奈良時代に位置付けられる。ＳＩ185とＳＩ190はＳD170溝跡との重複関係から、ＳＩ185はＳＩ190よりも古く同時に存在はしない。次に住居跡の特徴を述べる。位置的にはA区の南部にあるＳＩ44以外はB区の北東部で近接している。規模は3～4m程の正方形で、方向はいずれも真北に対して若干東に偏する。床面は貼床され、周溝が巡り、カマドは北壁につけられている。以上のように各住居跡はよく似た構造を示しており、何らかの規制を受けての結果と推定される。

一方、ＳＩ44の近くから同時代に属するＳE84井戸跡が検出され、両者の間に関連性が認められる。

Ｄ．ＳＸ200ウマ集積遺構

今回の調査で自然のくぼみから多量のウマの骨が一括して出土し、年代はこれらとともに出土した土器から奈良時代に位置付けられる。また骨の遺存部位と出土状況より、解体した後に一か所にまとめて捨てられたと推定される。この他にも古代～中世期の溝や土壙の埋土中からウマの骨や歯が出土しており、これらも含めた全体の現象をどう理解すべきかが今後の課題である。

なお、周辺遺跡では多賀城内をはじめとして、市川橋遺跡水入地区(森;1982、高倉・滝口・石本；1984)から、古代のウマの骨が出土している。

Ｅ．遺跡の構成

遺物・遺物の年代は①奈良時代以前、②奈良時代、③平安時代前半頃、④平安時代後半頃の4群に大きく分けることができ、この他に所属年代を特定できないものがある。次に年代毎に所属する主な遺構を列記し、概要を述べたい。

①奈良時代以前：これに属する遺構は検出されなかったものの、縄文時代と古墳時代の遺物が出土している。これらの遺物は河川によってこの地に運ばれてきたものである。
②奈良時代：ＳＢ140・141・245・246・319・320掘立柱建物跡、ＳＩ44・185・190・235住居跡、ＳＥ66・84井戸跡、ＳＸ01甕棺墓、ＳＤ21・131・132畝状遺構、ＳＤ100河川跡をはじめ、溝跡や土壙、ＳＸ200ウマ集積遺構などがあり、生活の場として確認された最も古い段階である。この時期の掘立柱建物跡や竪穴住居跡は方向に斉一性が認められたことから、何らかの規制を受けたと推定され、奈良時代には既に建物などの方向を規制する「地割り」が存在した可能性が考えられる。また竪穴住居跡に隣接して井戸跡が検出され、両者の関連性が認められる。そして微低地を利用して畑作が行われており、居住の場と生産活動の場が区別されていた。
③平安時代前半頃：ＳＸ299・300道路跡、ＳＥ76・217井戸跡、ＳＸ133甕棺墓、ＳＤ47・48・50・51・95・188・259畝状遺構をはじめ河川跡、溝跡、土壙などである。この時期では東西道路と南北道路が検出され、多賀城周辺部には少なくとも1町毎に道路が付けられていた可能性がある。掘立柱建物跡はこの時期に限定できるものは確認されていないが、存在したことは十分に考えられる。また竪穴住居跡は姿を消し奈良時代とは少々異なった様相を示す。生産活動の場としては引き続き河川跡を利用して畑作が行われている。
④平安時代後半頃：ＳＤ14河川跡や土壙などである。遺構数は大幅に減少し、生活の場としての機能は平安時代前半頃をピークにしてそれ以後、衰退していくようである。

2．中世

堀を巡らせた屋敷跡が検出され、敷地内からは掘立柱建物跡や井戸跡などが見つかり、居住の場としての性格が明らかとなった。以下、屋敷跡と掘立柱建物跡について検討を加える。

Ａ．屋敷跡

方形の堀を巡らせた、中世の屋敷跡の北半部が検出された。

堀は西辺で4時期あることが分かり(古い順にA期［ＳＤ29］→B期[ＳＤ28]→C期[ＳＤ20Ａ]→D期［ＳＤ20Ｂ］)、その中で、B期とC期では西側へずらして作り替えており、徐々に敷地面積が拡大していったようすが窺われる。北辺ではこのような変動は認められない。したがって、堀の規模は北辺でB期の段階が43m、D期の階段が51mであり、西辺は34m以上ある。一方、堀の北西隅から北へ延びる溝(ＳＤ05)が検出されたが、その規模と底面の高低差とから堀の排水施設と推定される。

堀の内側にはＳＤ27・29と平行する細い溝(ＳＤ31・40)が巡り、A期の段階に区画溝として機能していたと考えられる。そして堀がA期からB期へ移行する際にＳＤ29とともに埋め戻されている。

この屋敷跡の年代は、堀から中世の陶磁器や中国銭が出土していることから中世であることは明らかである。さらに、ＳＤ28が埋め戻された後に掘り込まれたＳＫ33土壙から出土した磁器(中国産)は16世紀のものと思われることから、中世の後半には確実に使用されていたことになる。

その他、屋敷跡の東側にもＳＤ150溝跡で画された別の区画域の存在が想定される。

このように平野部に立地し、堀を巡らせた屋敷跡の調査例としては多賀城市新田遺跡(千葉；1988)、仙台市今泉城跡(佐藤；1983)、仙台市南小泉遺跡(菊地；1983)などがある。この中で位置的関係から関連性が窺われる新田遺跡は本遺跡から西方約1.5㎞、同じ七北田川と砂押川とに挟まれた自然堤防上にある。この遺跡からは幅約10mの堀で東西約200m、南北約300mの方形に区画する大規模な武士の館と、第5次調査で検出された幅1～3mの溝で東西44m以上、南北約17mを区画する武士の館をはじめとするいくつかの小規模な館跡が検出されている。これらと本遺跡のものとを比較すると小規模な館跡と近似しており、今後、周辺遺跡も含めながら性格を考えていく必要がある。

今回の調査では屋敷跡の居住者を特定できるような資料はなかったものの、文献を見ると「留守文書」や「留守家旧記」中にこの地域に関連した内容が記されている。それによれば、鎌倉時代この付近一帯には『高用名』『南宮庄』が存衣し留守氏の領地であった。さらに、室町時代も引き続き留守氏の支配下にあり、中世全般を通して留守氏と深く関わった土地であったことが読み取れる(佐々木；1980、伊藤；1980)。したがって、本遺跡の屋敷跡の居住者については留守氏と関連のある者が考えられよう。

Ｂ．掘立柱建物跡

屋敷跡内には屋敷に伴うと思われる多数の柱穴が発見され、現段階では5棟が中世に属する可能性を持つ。このうちＳＢ303はＳＢ304より新しく、同時存在はない。建物の規模は桁行4間×梁行2間、2間×2間、2間×1間で、小規模なものが多く、柱間はばらつきが目立つ。建物の方向はほとんどが真北に対して東へ若干偏する。柱穴は方形や円形で一辺が0.4m程の小さなもので、埋土は主に黒褐色土である。建物の性格について小規模なものに関しては倉庫や納屋等が考えられる。なお、この他の屋敷内から検出された柱穴も、形態や規模、埋土などは同様のあり方を示している。

多賀城周辺で中世の掘立柱建物跡が検出された遺跡は新田遺跡北寿福寺地区(千葉;1988)、山王遺跡山王二区(石本・相沢;1986)、多賀城跡第39次発掘調査(高野・佐藤；1982)などがある。これらの特徴として、柱穴は直径0.3～0.4mの円形を呈するものが多く、本遺跡と一致する。また、3遺跡から検出された建物跡は小規模なものから大規模なものまであるが、特に新田遺跡北寿福寺地区では庇や間仕切りの付いた複雑な構造の大規模な建物跡が多い。これに対

し本遺跡では、その多くは小規模なもので、新田遺跡で認められたような構造の建物は確認されていない。おそらく、屋敷跡の中心的な建物は、これらに類似したものと想定され、その建物の位置は調査区のさらに東・南側にあると考えられる。

3．まとめ

①古代の遺構は道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、畝状遺構をはじめとして多数検出され、奈良時代・平安時代前半頃・平安時代後半頃の3時期に大きく分けられる。
②本調査区では、生活の場として利用され始めるのは奈良時代からで、それから平安時代前半頃までが遺構の最も密集する時期である。これ以後は遺構の数は激減し、生活の場としての機能を停止する。
③多賀城周辺部において、奈良時代には既に建物などの方向を規制した計画的な「地割り」の存在が指摘でき、さらに平安時代頃には少なくとも1町毎に道路が付けられていた可能性が考えられる。
④調査区内では居住の場と生産活動の場とがほぼ明確に区別されていた。すなわち、生産活動の場を河川跡のくぼみ－微低地に求め、掘立柱建物や竪穴住居はそれ以外の場所を選択しており、土地利用の仕方が理解できる。
⑤中世では方形に堀を巡らせた屋敷跡が検出され、遺物は堀や土壙などから中世陶磁器・古銭・漆器椀などが出土した。堀は西辺で4時期の変遷が確認され長期間にわたり機能していたものと思われる。屋敷内には掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、多数の柱穴などが検出された。
⑥この屋敷跡の東側にも溝で画された別の区画域の存在が推定された。

引用参考文献

相沢清利(1989)；「多賀城市山王遺跡第8次・仙塩道路関連(八幡地区)の発掘調査」『第16回　古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会

石本　敬・相沢清利(1986)；「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第9集　多賀城市教育委員会

伊藤　信(1980)；「中世編、室町・戦国時代の多賀城ー多賀城ー」『多賀城市史編さん報告書』第1集　多賀城市

菊地逸夫(1983)；「南小泉遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第94集　宮城県教育委員会

小山正忠・竹原秀雄(1973)；「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社

佐々木光雄(1980)；「中世編、鎌倉時代ー多賀城ー」『多賀城市史編さん報告書』第1集　多賀城市

佐藤　洋(1983)；「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第58集　仙台市教育委員会

白鳥良一(1980)；「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

白鳥良一(1981)；「第37次発掘調査ー多賀城跡ー」　『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980

鈴木真一郎(1988)；「山王遺跡・市川橋遺跡の発掘調査について」『昭和63年宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨』宮城県教育委員会

高倉敏明・滝口　卓・石本　敬(1983)；「市川橋遺跡調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第4集　多賀城市教育委員会

高倉敏明・滝口　卓・石本　敬(1984)；「水入地区ー市川橋遺跡調査報告書ー」『多賀城市文化財調査報告書』第5集　多賀城市教育委会

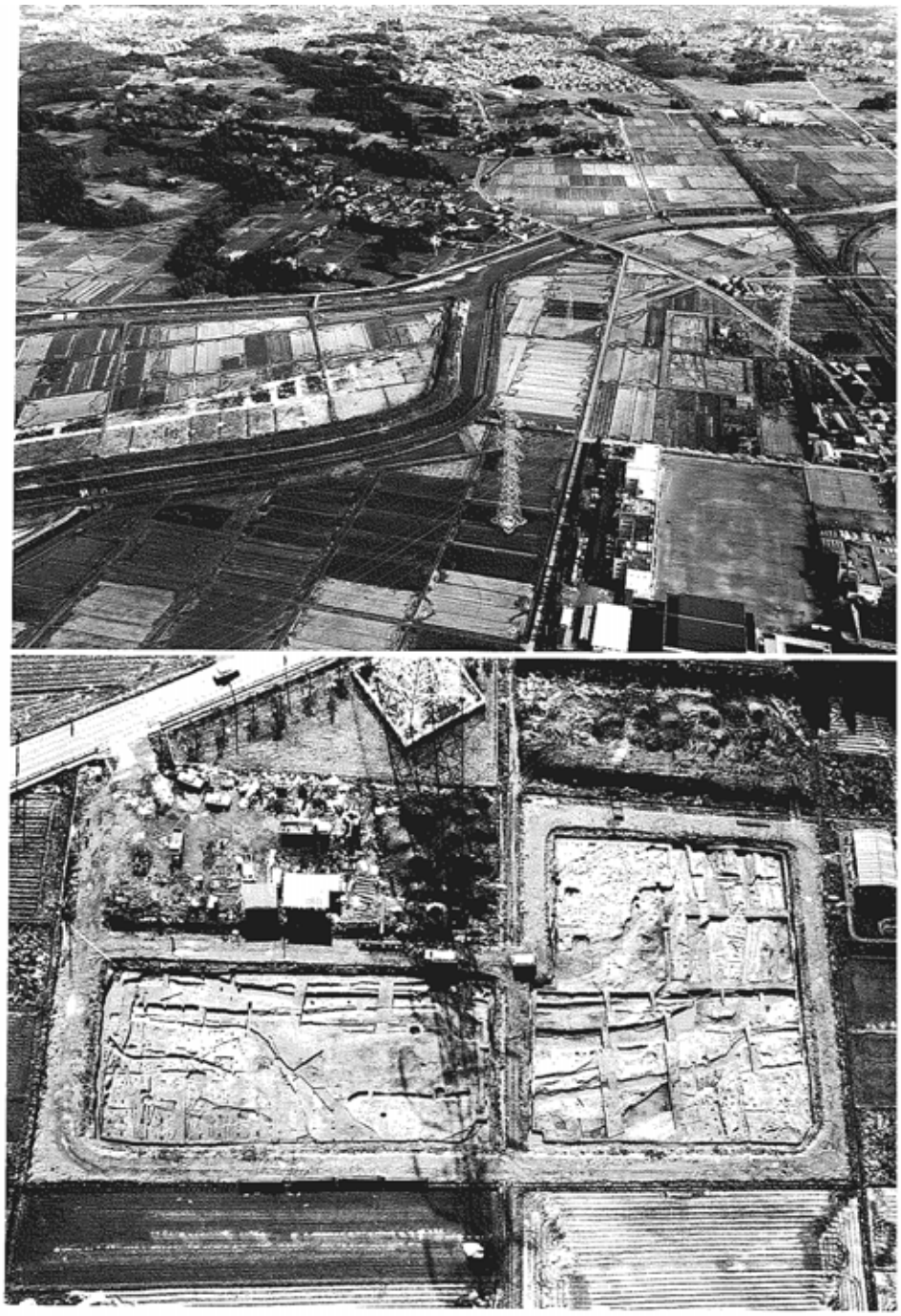
多賀城市埋蔵文化財センター(1988)；「新田遺跡(第8次調査)現地説明会資料」

高野芳宏・佐藤則之(1982)；「第39次発掘調査ー多賀城跡ー」『宮城県多賀城跡調査破研究所年報』1981

千葉孝弥(1988)；「新田遺跡寿福寺地区発見の中世遺構」『東北中世史研究会11月例会資料』東北中世史研究会

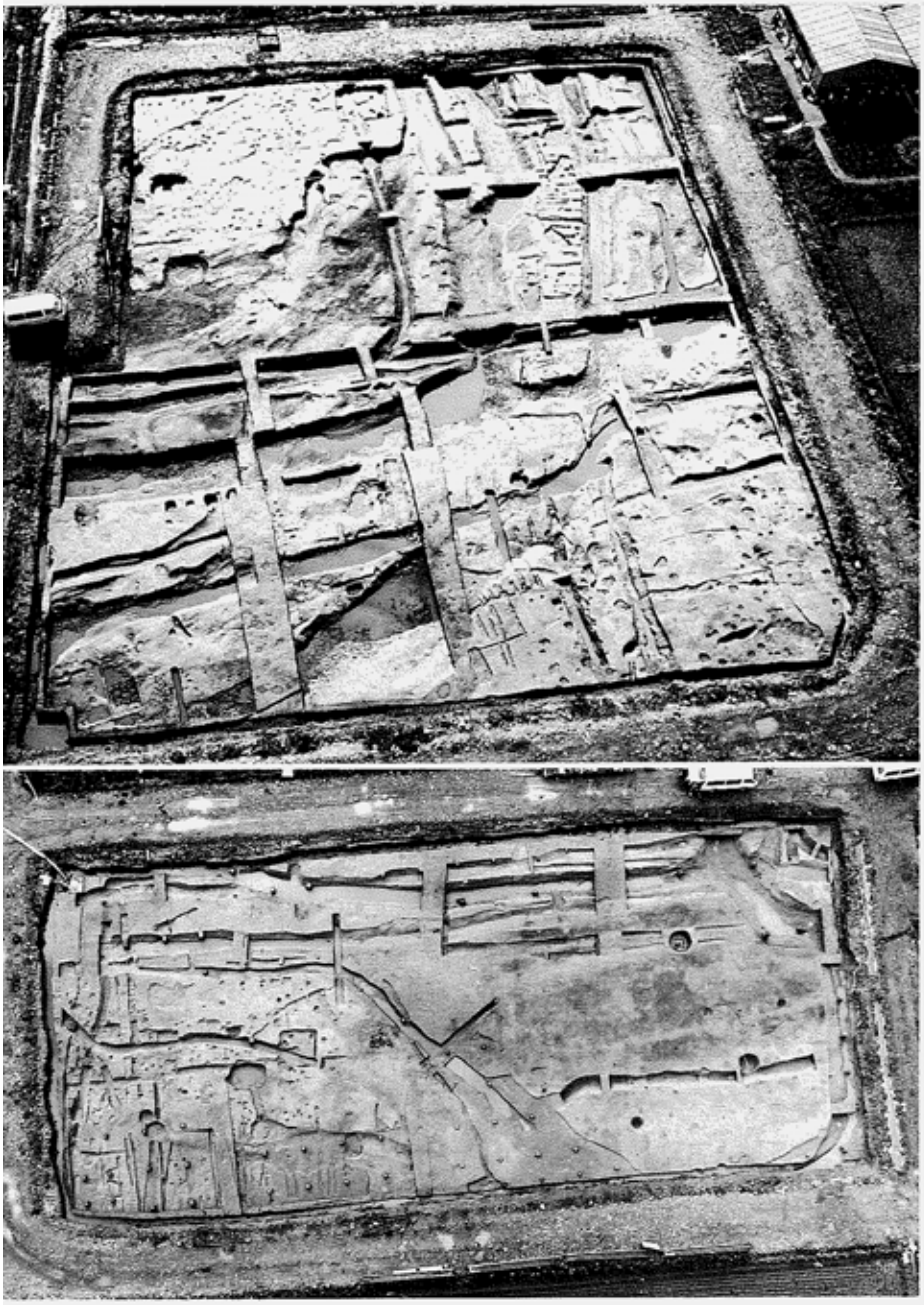
森　貢喜(1982)；「水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第84集　宮城県教育委員会

写　真　図　版



上　遺跡遠景
下　遺跡全景

図版 1

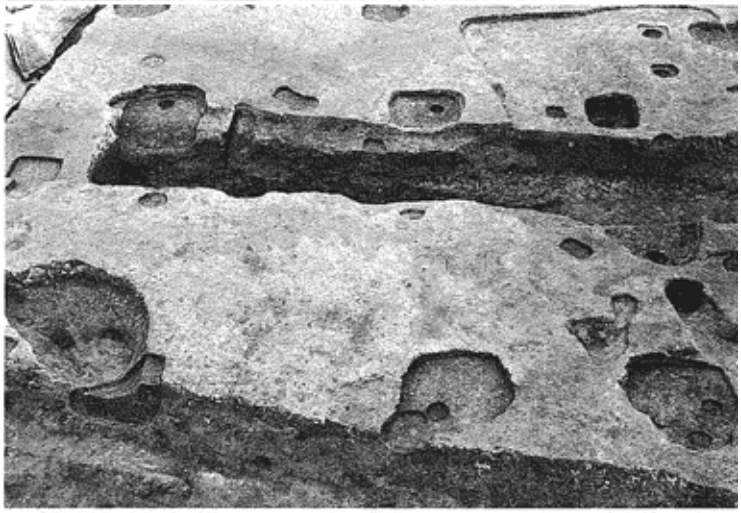


上　A区全景
下　B区全景

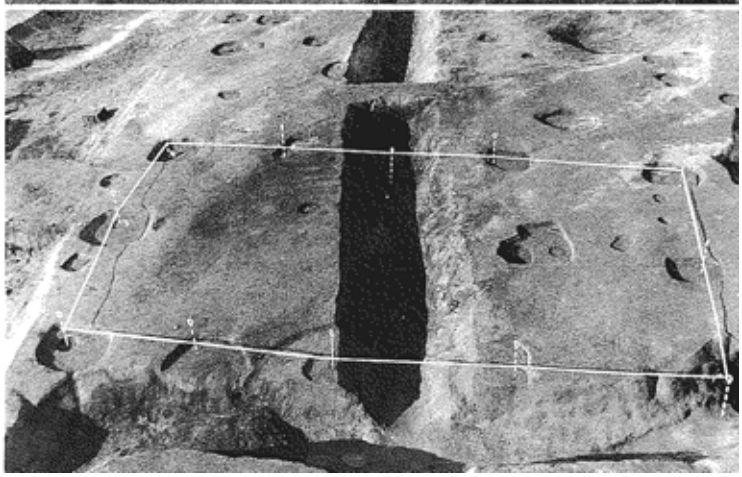
図版 2

A区　S B140

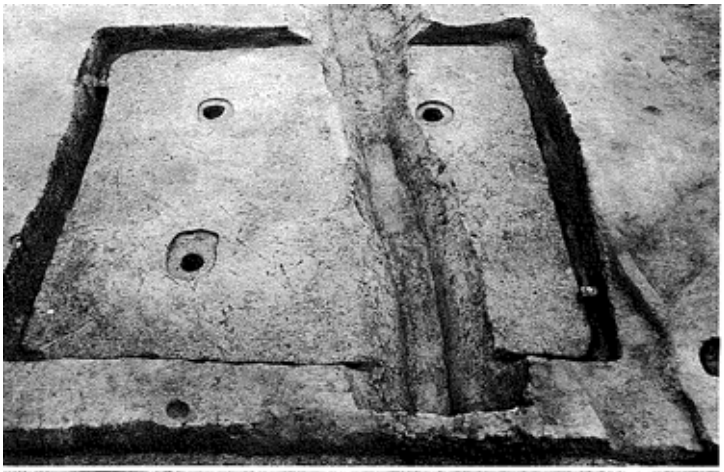
A区　S B141



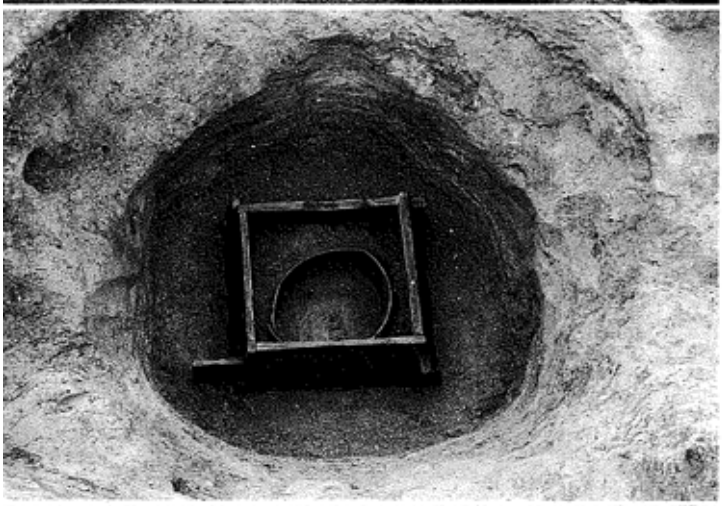
A区　S B56



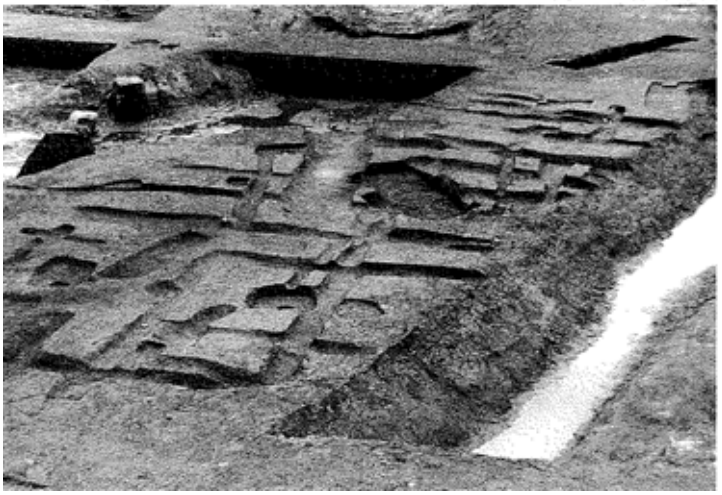
図版 3



A区　S I 44



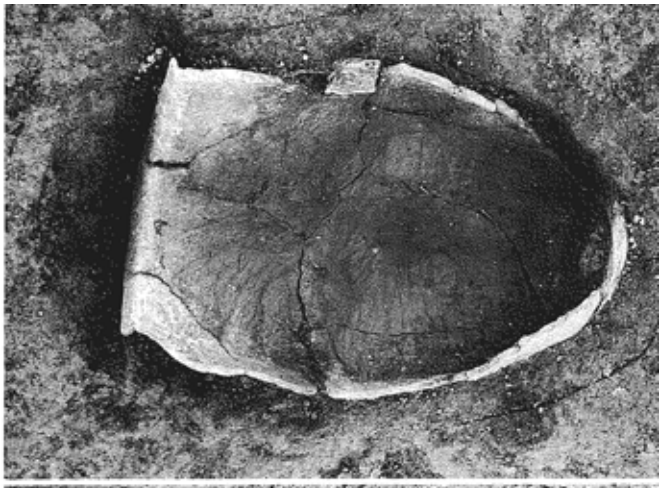
A区　S E 84



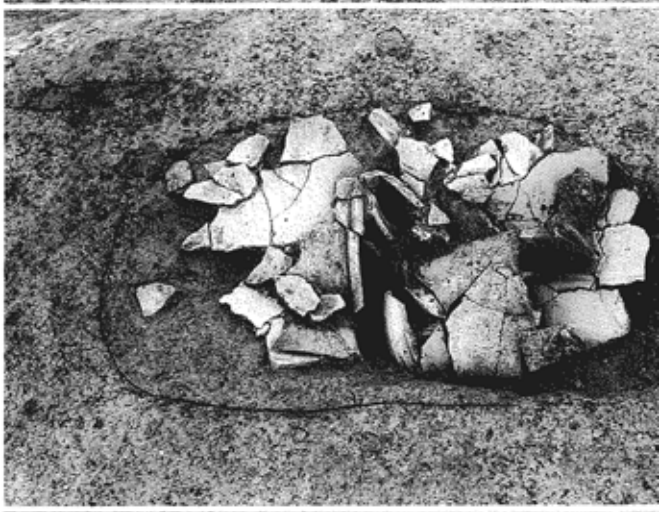
A区　S D 47・48

図版 4

A区　SX01

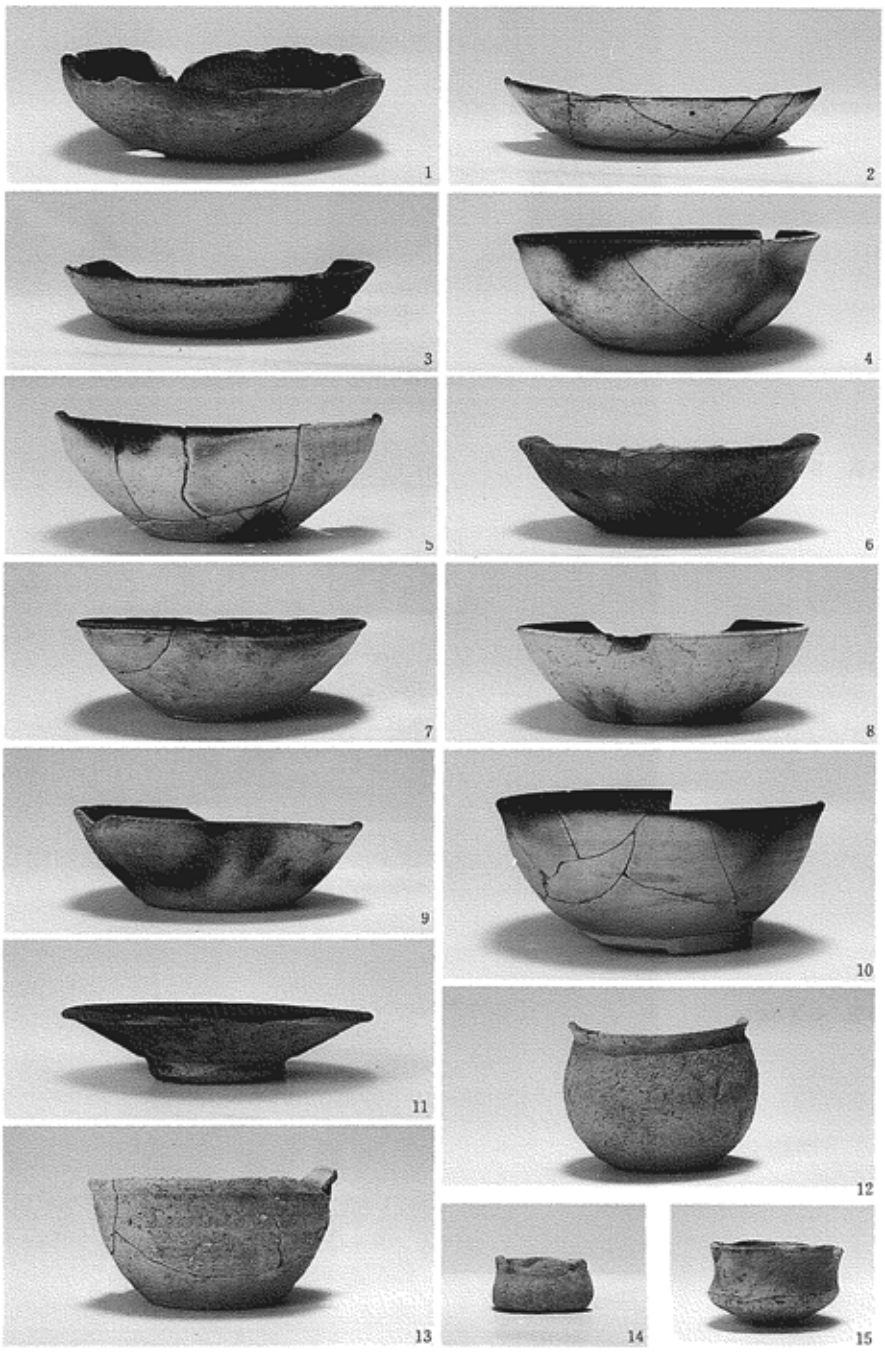


A区　SX133

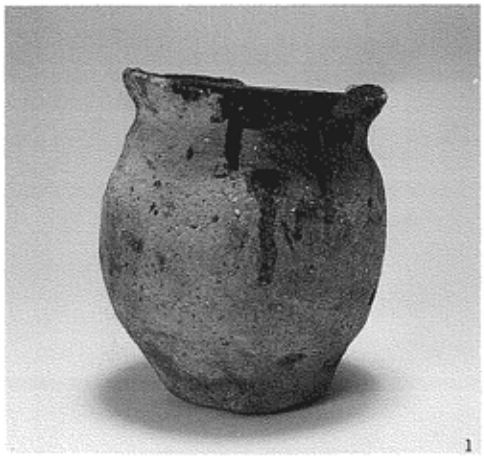


B区　SX200

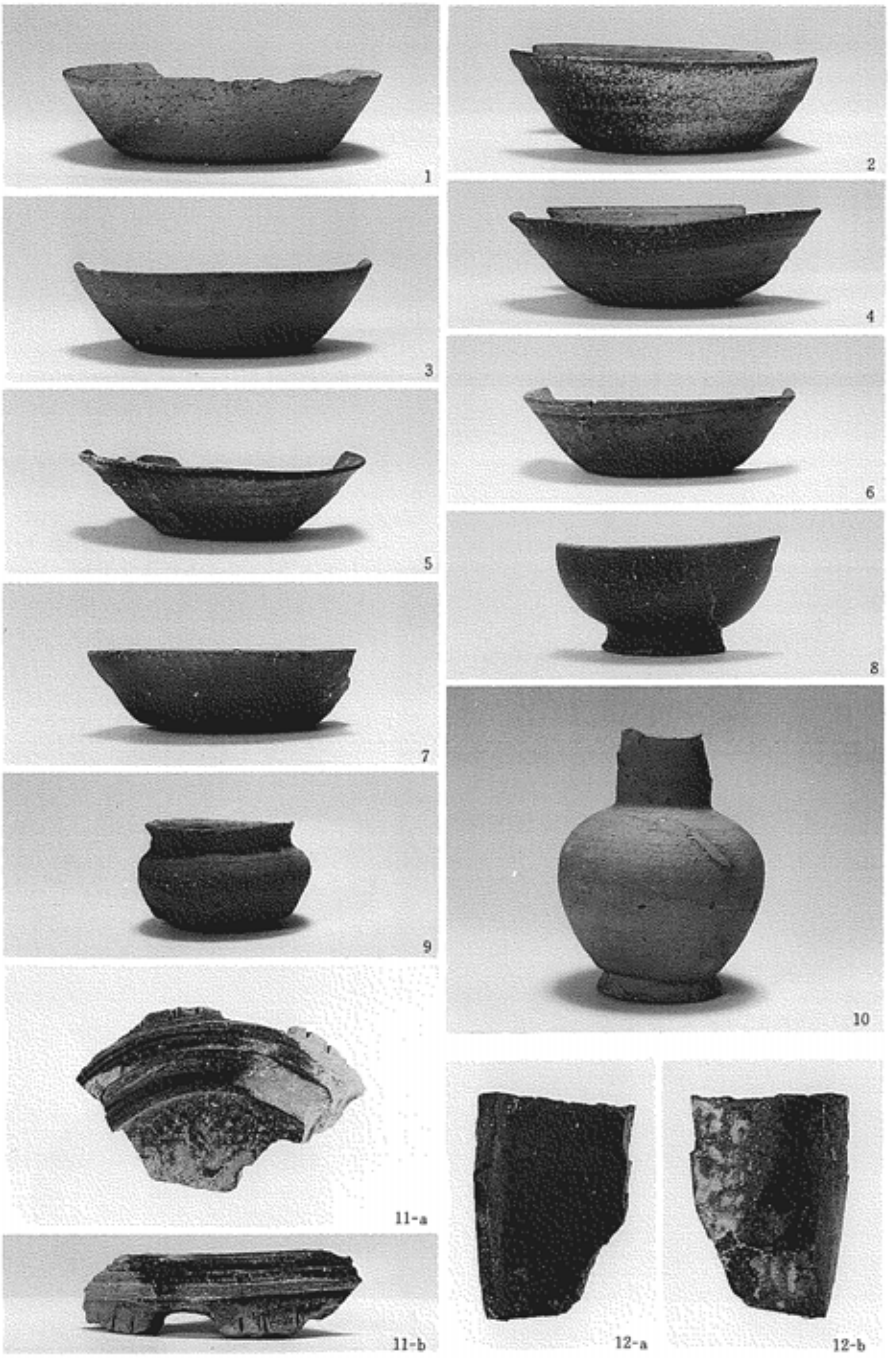
図版5



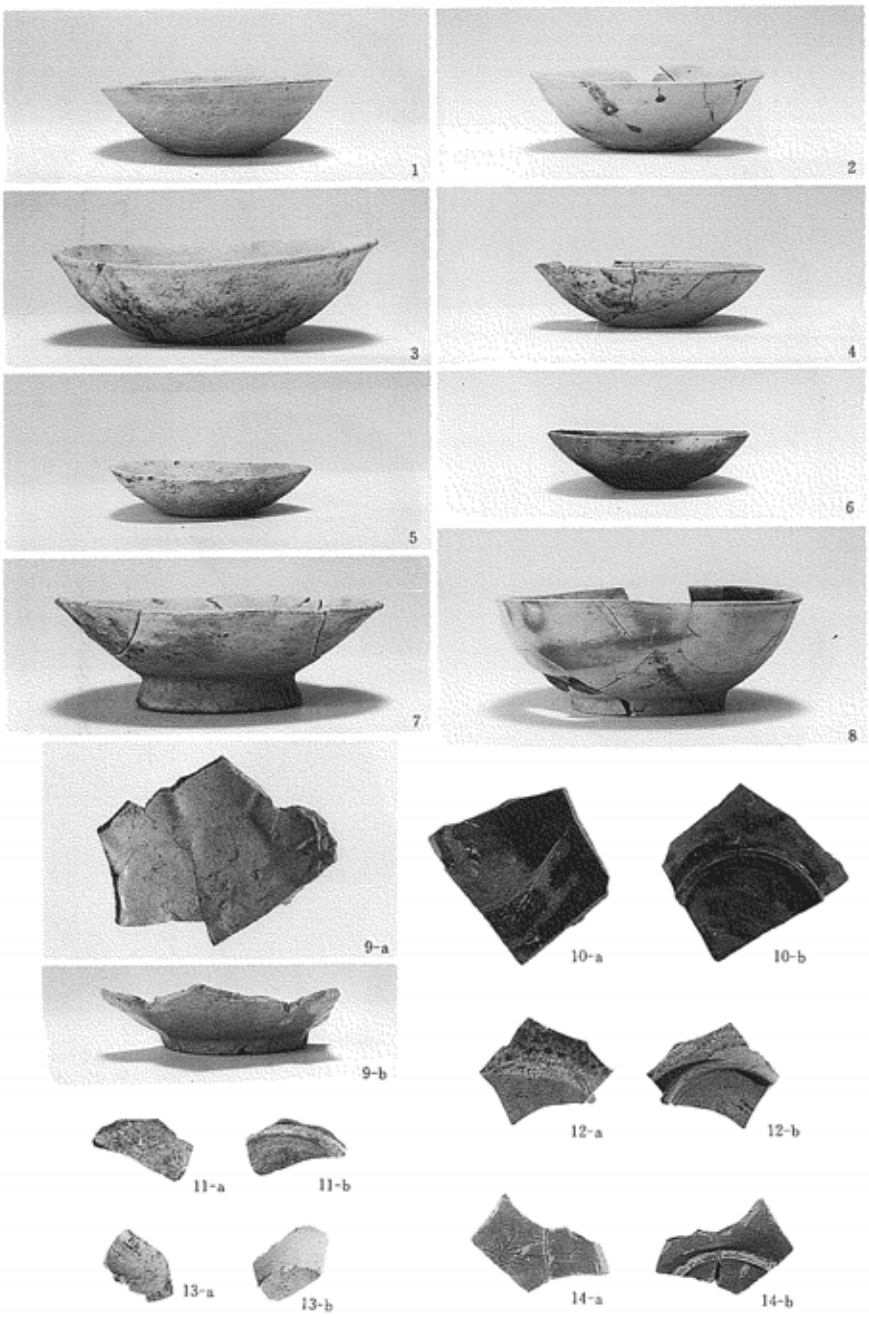
図版 6



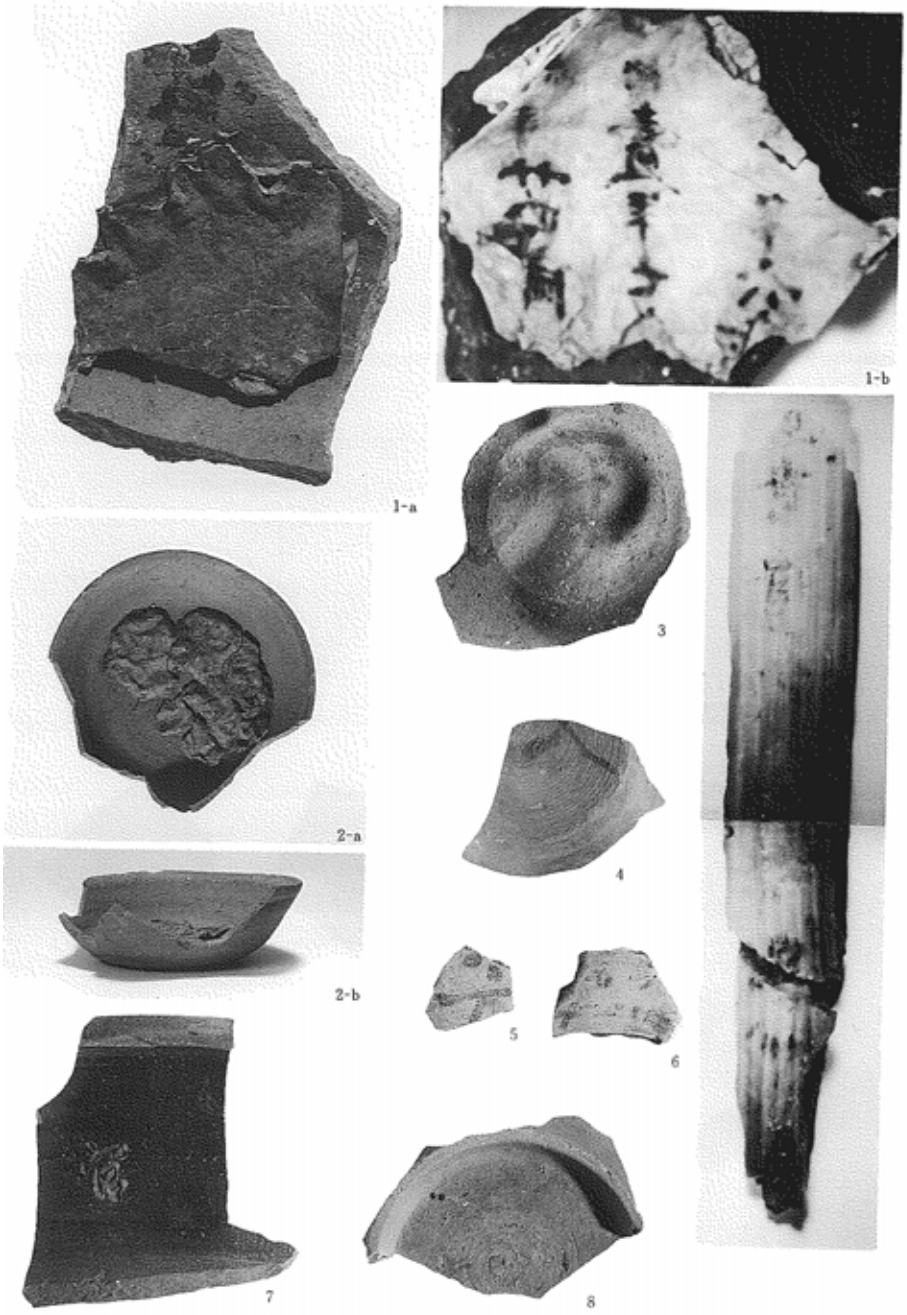
図版 7



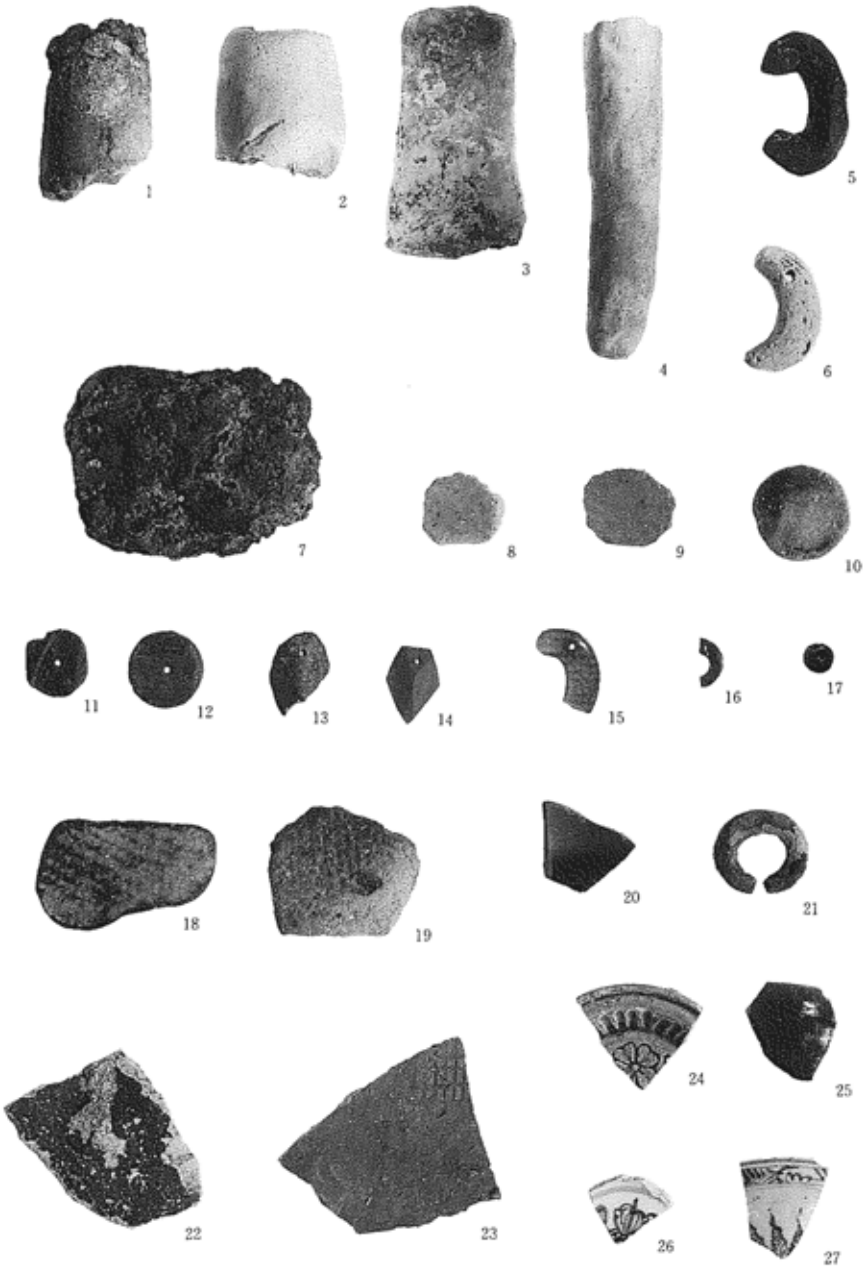
図版 8



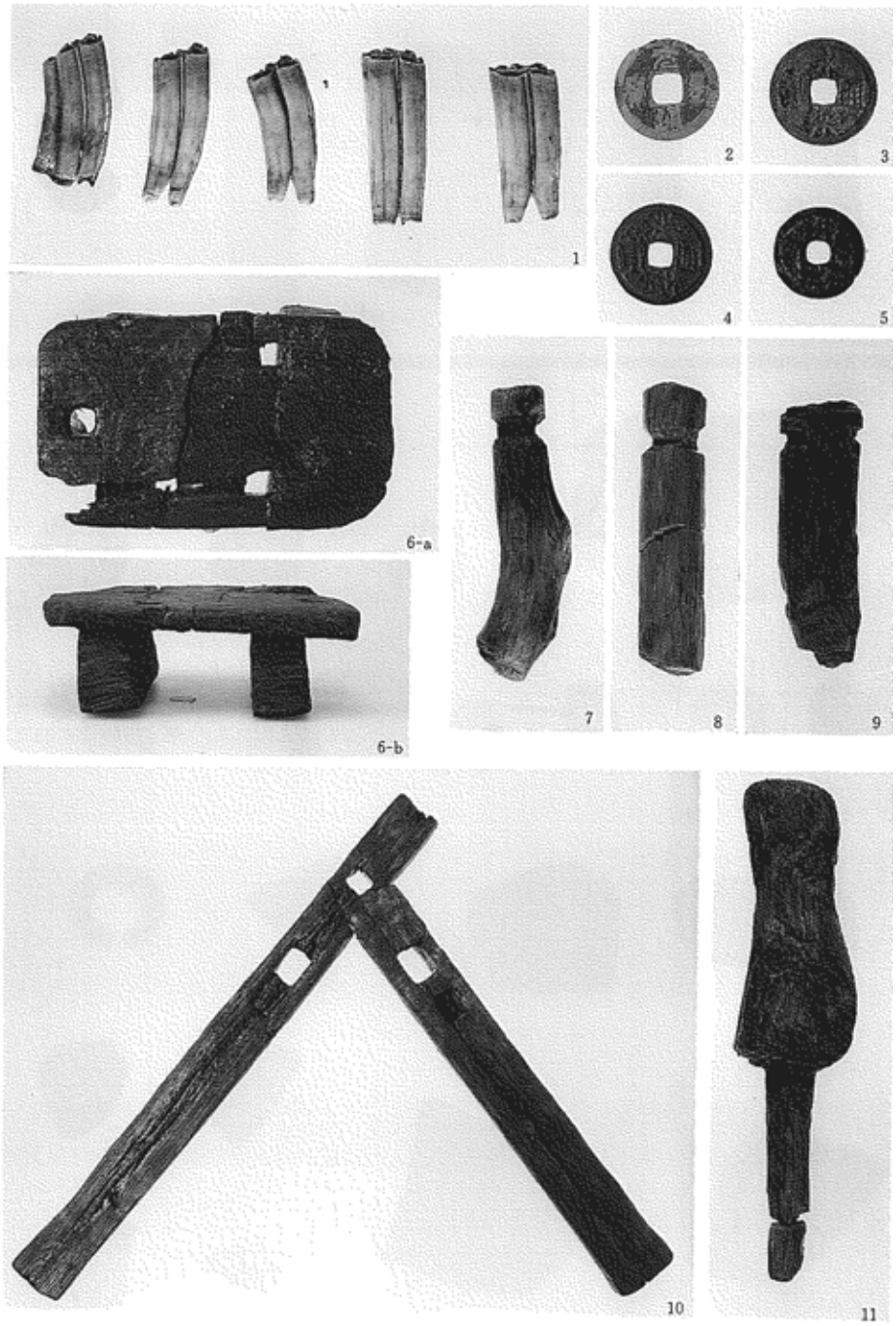
図版 9



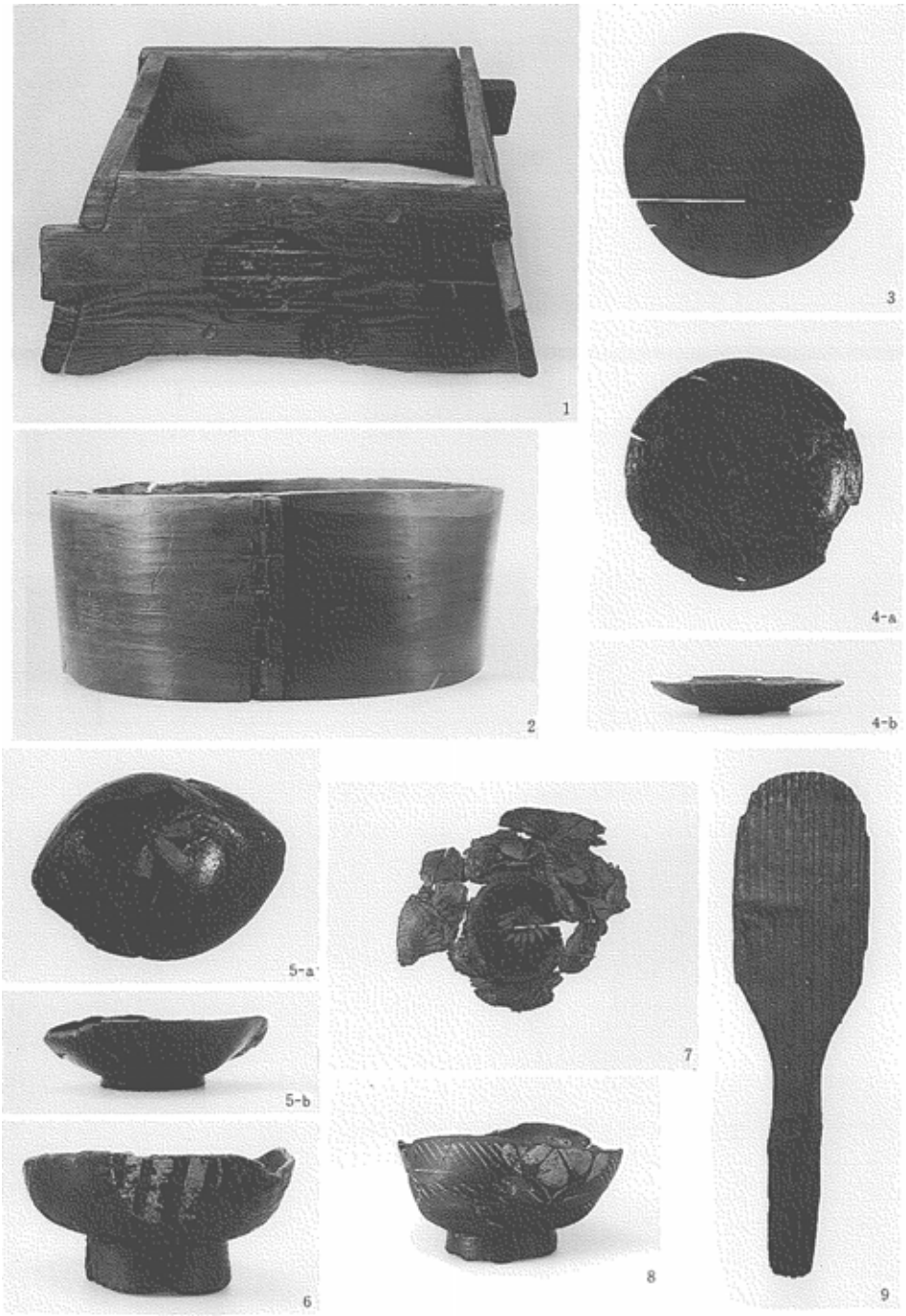
図版10



図版11



図版12



図版13